国立大学法人
和歌山大学
wakayama univ.

2023

地域連携プログラム活動報告書

Local Partnership Program（LPP）

地域が抱える課題を住民とともに発見し、

その解決方法を考える

和歌山大学観光学部

はしがき

和歌山大学観光学部における「地域連携プログラム（LPP)」は、前身となる「地域インターンシッププログラム（LIP)」の取り組みをリニューアルする形で 2022 年度より再スタートし、2 年が経過しました。LIP の時代を含めると、2008 年度に開始されて以降、これまでに 203 件のプログラムが実施され、延べ 2,200 人以上の学生が地域での様々な活動を通じた実践的な学びの機会を得ています。2020 年度からはコロナ禍の影響により、現場での実践、地域の方々との交流・対話を通じた学びを基軸とする本プログラムにとっては厳しい状況が続きましたが、地域の皆さまには、本学部の感染防止対策にご理解、ご協力をいただくとともに、オンラインでのコミュニケーションや、現地での受け入れ方法の工夫など、様々なご配慮によりプログラムの継続をご支援いただきました。また今年度からは、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したことを受け、ほぼコロナ禍前と同水準の現地活動を実施することができるようになり、連携教育型、学生主導型を合わせて 18 のプログラムを実施することができました。学生の受け入れやプログラムの実施にご尽力いただいている地方自治体や関係諸団体の皆様のご支援とご協力に、心から感謝を申し上げる次第です。

さて本学部は、「観光経営」「地域再生」「観光文化」の 3 つの基本領域を軸として、これらの領域を融合的かつ横断的に学ぶカリキュラムに取り組んでいます。高度な専門性と現場での創造的実践力を獲得することを目標に、国際性を養う教育と国内外の地域の諸課題に向き合う実践型教育を重視する本学部のカリキュラムにおいて、地域の現場で起きている事柄を身をもって学ぶことができる LPP は、LIP の時代より観光学部の実践型教育の一翼を担う取り組みとして重要な位置を占めてきました。

冒頭に触れた LPP へのリニューアルは、学生の実践型教育プログラムとしての基本に立ち返り、地域の皆さまにも学生を育てていただく中で、学生たちが主体性を発揮し、地域との連携・協働による活動を発展させることを意図しております。活動の中心となるのは知識や経験も未熟な学部の 1・2 年生であり、関係の皆さまには様々なご負担をおかけする場面もあるかと思います。また、活動の結果として、現地調査や商品開発、イベント開催などの成果も多く得られておりますが、一方で想定通りに活動が進まないケースも見られるかと思います。学生たちにとっては、そのような経験も含めて貴重な

学びであり、自分たちの取り組みのどこに問題があり、改善のために何をすべきかを地域の方々とともに試行錯誤するプロセスが、LPP においてはより重要です。そうした着実なプロセスの先に、学生のみならず地域の皆さまにとっても、新たな気づきや、小さくとも意味のある成果が得られるならば、LPP は地域の皆様にとっても価値ある取り組みになるものと考えております。

LPP の取り組みを、大学と地域の双方にとって実りあるものとするため、今後ともご支援ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2024 年 3 月

和歌山大学観光学部

地域連携委員会　永瀬節治

目次

はしがき 2
目次 3
１．LPP の概要とこれまでの歩み 5
１）LPP の概要 5
２）データでみる LPP の歩み 6
２．2023 年度 LPP 活動報告 10
１）和歌山県和歌山市 12
２）和歌山県紀の川市 14
３）和歌山県海南市 16
４）和歌山県海草郡紀美野町 18
５）和歌山県有田市 20
６）和歌山県有田市 22
７）和歌山県有田郡湯浅町 24
８）和歌山県日高郡美浜町 26
９）和歌山県田辺市 28
１０）和歌山県東牟婁郡那智勝浦町 30
１１）和歌山県（新宮市、田辺市本宮町、那智勝浦町） 32
１２）大阪府阪南市 34
１３）大阪府岸和田市 36
１４）大阪府岸和田市 38
１５）和歌山県有田郡有田川町 40
１６）和歌山県西牟婁郡白浜町 42
１７）福井県福井市、富山県南砺市 44
１８）和歌山県和歌山市 47
3．LPP 参加学生交流会 2023 の実施 50

4. 2023 年度 LPP 合同活動報告会の実施 52
1）発表について 52
2）発表の実施報告 55
参考資料 64
1）LPP の沿革 64
2）これまでの LIP/LPP 活動地域と活動テーマ一覧 67

１．LPP の概要とこれまでの歩み

１）LPP の概要

和歌山大学観光学部では、学部創設の 2008 年より、和歌山県内及び大阪南部の市町村などの協力のもと、地域が抱える課題を地域住民とともに発見し、その解決方法を考える「地域インターンシップ・プログラム」（通称：LIP）を実施してきた。本プログラムは、地域活性化に関心をもつ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携することによって地域の課題や調査活動に取り組むもので、「学生と地域を活性化したい」、「地域の魅力を発見したい」といった地域からの提案を受け、毎年複数の活動を実施してきた。

LIP に参加する学生は、学内の事前学習や現地視察を通して地域の実情を学び、さらには現地調査や地域住民との交流、イベントの企画運営などを通じて、それぞれの地域の真の魅力や課題と向き合っていく。具体的なプログラムとしては、観光施設の職員や利用者への聞き取り、宿泊施設や農家民泊のモニター、集客イベントの企画運営、観光資源調査やマップ作成、就業体験などに取り組んできた。「この地域にはどのような観光資源があるか」、「埋れている観光資源はないか」、「観光資源が有効に活用されているか」、「どうすれば地域が元気になるか」。こうした課題に対して、地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動をしていく。このような対話や活動が、双方にとって新たな気づきの機会となることもこのプログラムの特徴である。

LIP は、こうした相互作用を通じて、地域住民は「ヨソ者」の力を活かしながらより自立的なまちづくり活動を行う力を、そして学生は地域住民の思いを理解しつつ、地域活性化の方法を提案できる力を養い、地域を支える人材として活躍することを目指し、2021 年までに計 166 件のプログラムを実施し、延べ 1,800 名以上の学生が参加した [1]。

2022 年度からは、LIP の取り組みの中で見えてきた成果と課題を踏まえ、プログラムの持続可能な運用と質的向上を両立させるため、「地域連携プログラム（Local Partnership Program，通称：LPP）」へと名称を変更し、新たなスタートを切った。

LPP では、観光学部教員と受入地域が連携して活動計画を作成し、学生を募集して活動を実践する「連携教育 LPP（通称、L ゼミ）」と、学生が主体となり、地域と連携しながら活動を実践する「学生主導 LPP（通称、L 活）」の 2 種類がある。L ゼミには、和歌山県内及び大阪南部の市町村など、地域から活動内容を公募する「地域公募タイプ」と、観光学部教員が地域での研究活動等の一部をプログラム化する「教員申請タイプ」の 2 つの実施形態がある。本プログラムでは、観光学部の教育カリキュラムの一環として、地域住民と連携した現場での学びを通し、地域の観光振興および地域再生の実践を学ぶことのできる内容を含むことを実施の条件としている [2]。

---

[1] 2021 年度までの LIP の取り組みについては、観光学部ホームページを参照。
（https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/internship/lip/index.html）

[2] L ゼミは、単位として認定されている。単位取得のためには事前事後学習を含めて 30 時間以上の活動が求められ、活動時間に応じて、「基礎自主演習」または「プロジェクト自主演習」の単位が認定される。

２）データでみる LPP の歩み

観光学部の LPP は、前身の LIP を開始した 2008 年の開始から 15 年間実施してきた。ここでは、これまでの LIP および LPP の歩みについて、データをもとに示してしていく。

表 1 は、2008 年度以降の年度別実施プログラム数を示している。年度ごとのプログラム数にはばらつきがあり、最多 21 件（2016・2021 年度）、最少 3 件（2010 年度）となっている。2011 年度からは、観光学部専任教員からの申請により実施される申請タイプが創設され、プログラム数が安定するとともに幅広い活動が可能となっている。2022 年度からは新たに学生主導型のプログラムである L 活が新設され、今年度は 1 件のプログラムが実施された。

表１　年度別プログラム数

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	合計
Lゼミ	6	8	3	4 (1)	11 (5)	5 (2)	10 (3)	15 (6)	21 (7)	19 (4)	13 (3)	14 (4)	16 (3)	21 (3)	17 (2)	17 (3)	200 (46)
L 活	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	3
合計	6	8	3	4	11	5	10	15	21	19	13	14	16	21	19	18	203

※カッコ内は教員申請タイプのプログラム内数

次に、図 1 は年度別の参加学生数を示している。参加学生の延べ人数は 2014 年に 100 名、2016 年には 200 名を超えるなど、増加している。これは実施プログラム数が増加したとともに、プログラムあたりの定員規模の拡大が起因していると考えられる。ただし、全プログラムが拡大傾向を示しているわけではなく、現状では大規模のものと小規模のものが並存する状態にある（2023 年度は最少 2 名、最大 23 名）。この点は、プログラムの内容など、地域の課題やニーズに即したかたちで活動が実施されていることが影響している。

図１　年度別参加学生数

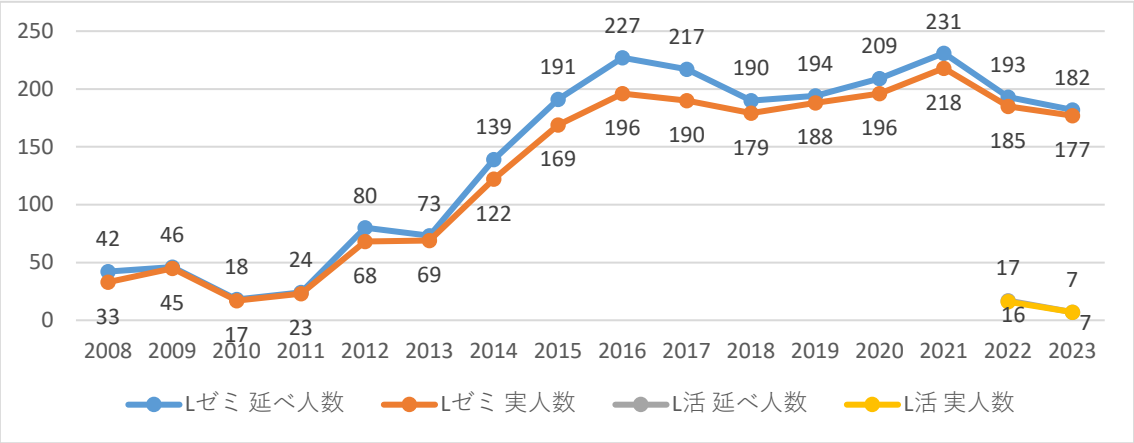


表 2 に示した通り、L ゼミの学年別参加学生数は 1 回生がもっとも多い。低学年次から地域での活動に関心を持ち、積極的に地域と関わりたいと考える学生が増加していることを示している。このような傾向は 2015 年頃からみられるようになったもので、図 2 のように、プログラム創設初期は 2、3 回生の参加が中心であった。

2022 年度から新設の L 活では、昨年度までは 3 回生の参加が最も多かったが、今年度は 1、 2 回生の参加が中心となった（図 3)。これは、去年活動した 1 回生が継続して参加したことと、 1， 2 回生で、より学生主体のプログラムを求める学生が増加したことが要因であると推察される。

表２　学年別参加学生数

			1 回生	2 回生	3 回生	4 回生
L ゼミ	延べ人数	2256	850	765	474	167
	実人数	2075	814	698	406	157
L 活	延べ人数	24	7	8	6	3
	実人数	23	7	7	6	3

図２　学年別Ｌゼミ参加学生数の変遷（実人数ベース）

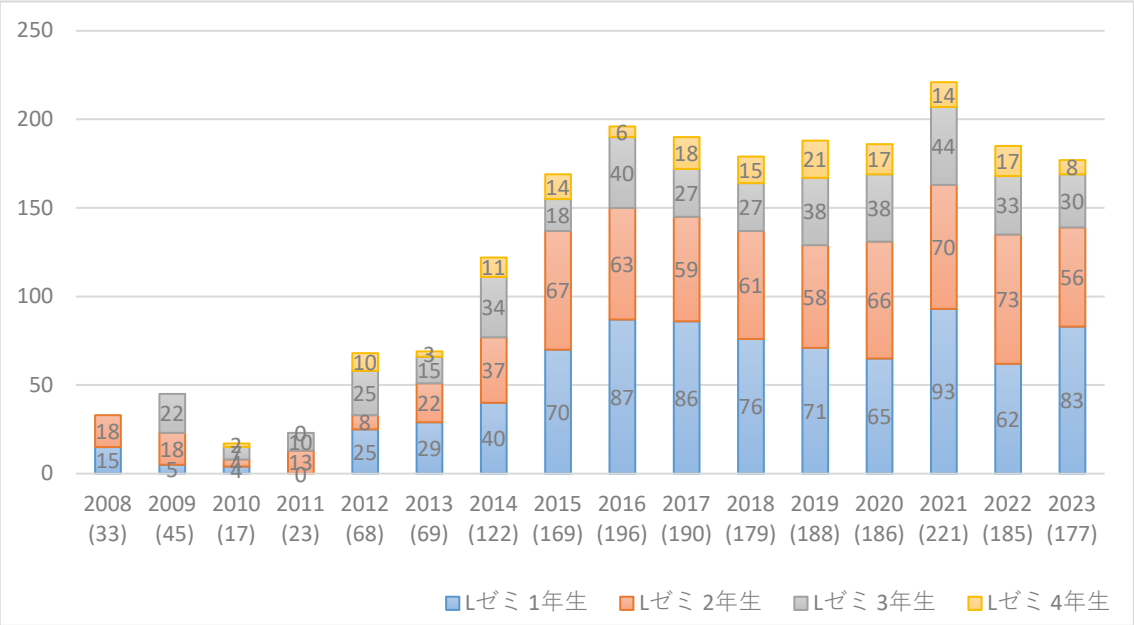


図３　学年別Ｌ活参加学生数の変遷（実人数ベース）

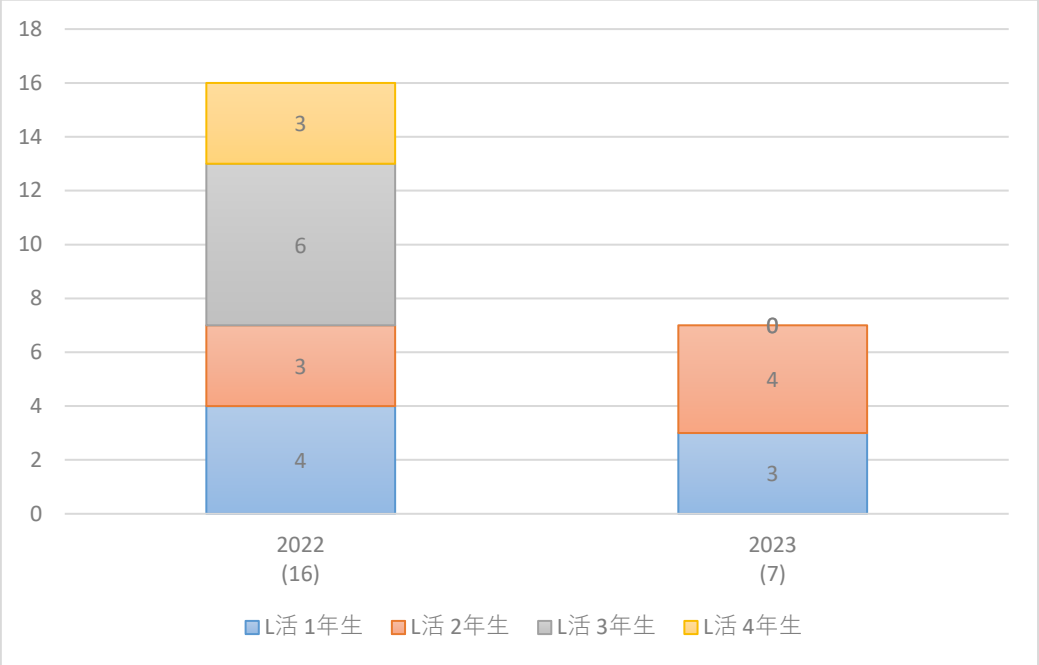
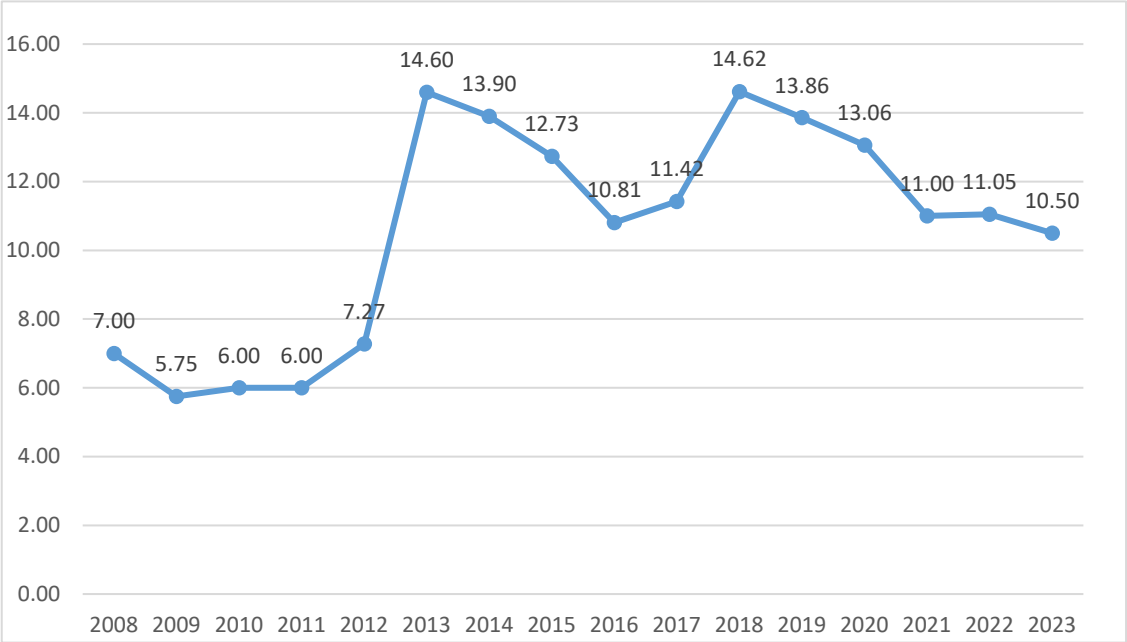


図４に示すのは、プログラムあたりの平均参加学生数である。先に述べた定員規模の拡大によりプログラムあたりの平均参加学生数が増加傾向であったが、2023 年度は全てのプログラムのうち半数が 10 名以下のプログラムとなるなど、近年は小規模で実施されていることもあり、徐々に減少傾向にある。

図４　プログラムあたりの平均参加学生数（延べ人数ベース）



以上のように、LIP の活動期間を経て、開始から 16 年となる本プログラムは、参加学生数ならびにプログラム数が安定していることから、参加学生および地域からのニーズを汲み取った活動が展開されているとみることができる。しかしながら、今後も継続的に本プログラムを実施するにあたっては、それぞれの取り組みの質の向上と学生自身が学びをより深めることができるプログラムを提供することが求められている。

（文責：観光学部 地域連携委員会）

２．2023 年度 LPP 活動報告

2023 年度は、18 プログラムが実施され、延べ 189 名の学生が地域で活動を行った。以下に示すのが今年度の実施プログラムの一覧である。

■ L ゼミ（連携教育 LPP）地域公募タイプ

No	地域名	テーマ	参加学生数
1	和歌山市	加太・磯の浦エリアにおける観光映像を活用した地域振興	9
2	紀の川市	紀の川市の新商品開発プロジェクト	8
3	海南市	大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、 暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する	8
4	紀美野町	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	13
5	有田市	ICT の活用による多世代で取り組むまちづくり	2
6	有田市	青みかん（摘果みかん）の価値を上げる	18
7	湯浅町	湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！	5
8	美浜町	美浜町の資源を生かした観光誘客	23
9	田辺市	「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョンの策定とシナリオプランニング	11
10	那智勝浦町	中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える	3
11	新宮市 田辺市本宮町 那智勝浦町	世界遺産登録２０周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、 熊野を盛り上げよう。	13
12	阪南市	阪南市の産業振興と魅力発信	6
13	大阪岸和田市	景観資源活用による景観意識の向上と 地域の賑わい・活性化への貢献	10
15	大阪府岸和田市	古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。	10

■ L ゼミ（連携教育 LPP）教員申請タイプ

No	地域名	テーマ	参加学生数
1	有田川町	学生との協働による棚田保全・集落支援活動	11
2	白浜町	白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズにあったサービスの企画開発	16
3	福井県福井市および富山県南砺市	北陸カレッジ 2023	16

■ L 活（学生主導 LPP）

No	地域名	テーマ	参加学生数
1	和歌山市	雑賀崎の観光スポットの情報発信と空き家の利活用	7

和歌山県和歌山市
加太・磯の浦エリアにおける
観光映像を活用した地域振興

【活動の基本情報】
参加学生数：9 名
（1 年生：5 名、3 年生：4 名）
活動期間：2021 年 5 月～2024 年 1 月
担当教員：木川剛志

1. 活動実施の経緯

加太･磯の浦エリアにおける観光映像を活用した地域振興として 3 年目の事業である。よって最終年度となる。当初は和歌山市とその提携先の南海電気鉄道株式会社との共同の事業であったが、当初の担当者はすべていなくなり、南海電鉄への出向者もいなくなったので、すべてが白紙の状態となっていた。当初求められたことは、加太・磯の浦エリアにおける様々なイベント事業に参加し、それに関連する映像や画像を Instagram などに投稿することが求められてきた。ただ、1 年目からもそうであるが、民間企業として COVID-19 の影響下でイベントの開催は困難であり、イベント事業への参加を中心とした本プロジェクトは社会情勢に大きく影響されてきた。結果、その枠組みの修正を行うには、カウンターパートとの関係性が十分に構築されず、また学生側のコミュニケーションも十分ではなかった。

2. 活動の内容

この LPP の趣旨が南海電鉄と和歌山市が開催するイベントへ学生たちが参加するというフレームであったため、そのイベントの再開がほぼない状況であったため、活動はなかった。そのため、年度末に和歌山市とのミーティングを行い、その結果として 1 月にリールの撮影をするとのことだった。

3. 活動を通じて

最終的には厳しい活動内容となった。ほぼ成果がない状態であり、やはり春の時期の活動の立ち上げの時に、意識を共有して課題に向けた解決について語り合わないと、その後、参加の打診があっても多くが参加しないという事態となった。

4. 成果ポスター

加太・磯ノ浦LPP

昨年度の課題認識

メンバーの加太への印象が活動において重要な要素？
計画の更なる具体化と連携強化
能動的/積極的な活動への参加と取り組み

3年目を終えて…

3年という長いスパンでの継続した活動は非常に難しかった

そのわけは？？？

・メンバー個人のスケジュールの激化
　⇒モチベの継続が難しい
・LPP活動に対する優先順位の低下
・行政側との連携不足
・行政/LPP内含め、人の異動が激しい

映像で仕事している・写真が趣味
実務的な面で頼りになる・沿線住みなど
※メンバー個人の
　スキル/ポテンシャルは高いのに．．．

【地域との関わり方に関して】
地域的特徴
・加太線沿線はほぼ住宅街
・落ち着いた/のんびりとした雰囲気の温泉街
⇕
・友が島は近年注目が高まる

「加太の中でも観光需要が異なる」

大きな疑問

・加太が認知されることを
　地域は望んでいるのか？
・自分たちの活動は自己満足の
　延長線上にあるのでは？

仮に行政と連携したとして・・・
一方的な観光振興になった可能性大

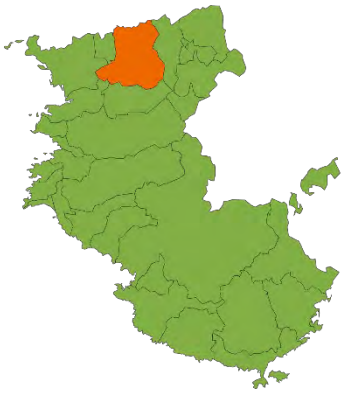
協働が重要なポイント
⇒必要とされていたか
ここを意識していたか？

【今後に関して】
本年度でLPP活動終了
得た学びなど・・・
・学生の地域との関わり方
・行政の事業に対する関心度合い
・地域から必要とされているか
行政・事業者・学生の3者の連携が結果

LPPのこれから
・LPP受入側との歩幅合わせ
・中心メンバーがどれだけ優先できるか
⇒継続性と関係の構築度が非常に重要

和歌山県紀の川市

紀の川市の新商品開発プロジェクト



【活動の基本情報】

参加学生数：8 名

（1 年生：4 名、2 年生：4 名）

活動期間：2023 年 5 月～

担当教員：竹田明弘

1. 活動実施の経緯

ＬＰＰ（紀の川市）では、これまでフルーツを用いた数多くのスイーツ商品を提携企業、店舗と開発、販売してきた。本年度は、これまでの活動をさらに発展させ、また、紀の川市という名称の知名度を上げるための活動を目的とし、手土産商品、加工商品の開発を目的としたプロジェクトをスタートさせた。本年は同プロジェクトの 1 年目である。

2. 活動の内容

これまで、紀の川市の店舗と協力しながら主に店舗で提供できるスイーツ、パンなどの開発を実施してきた。ただし、それだと現地でしか購入することができず、より広範囲な地域の顧客を対象として販売することにおいては限界があった。また、スイーツは基本的に生菓子であるため、消費期限が加工後数日しかなく、それも広範囲な地域の顧客を対象とした場合の課題であった。そこで、紀の川市と共同した新たな活動として手土産商品、加工商品の開発を目的としてプロジェクトがスタートした。ただし、これまでとは商品のタイプが異なるため、そこでの活動実績がない。地域の信頼も不十分である。そこで、本年は新しいタイプの商品開発の学習、データ分析の学習というグループとしての能力を高めるということを主眼に活動を実施した。こうした学習の一環として、本年は和歌山市に本店がある Patisserie SAVEUR と焼き菓子をベースとした手土産商品の開発活動を実施した。商品については現在も同店舗と共同活動の途中である。同商品は 2024 年度ゴールデンウイーク前後に発売予定である。さらに、昨年度のプロジェクトであった、近鉄百貨店　夏のお中元「紀の川アソートセット」が 6 月に発売されるにあたり、同セットの完成に向けた作業並びに広報活動を実施した。

3. 活動を通じて

将来的により大きな店舗と全国発売できるような商品を開発するためには、消費期限が長いこと、もしくはないことが要求される。そこで、本年は新たな試みとして加工食品の一つである焼き菓子の商品開発活動を実施した。ただし、データ分析に関する能力、マーケティングをベースとした思考など、まだまだ不足している部分は多く、社会により信用されるグループとなるために継続的に能力を高めていく必要がある。

4. 成果ポスター

紀の川市LPP

- 2023年度活動報告 -

紀の川市は和歌山県北部に仕置し、北は大阪府、西は和歌山市に隣接しています。
また、温暖な気候と紀の川がもたらす肥沃な土壌を最大限に利用して、野菜、果物など多種多様な農作物を生産しています。はっさく、いちじく、柿、キウイフルーツ、いちごなど四季折々の果物が収穫できる全国有数の果物産地です。

お中元企画第2弾

和歌山大学観光学部×紀の川市×近鉄百貨店
「紀の川アソートセット」

○内容○

- 九重雑賀 「いんでくら（梅酒720ml）」
- 観音山フルーツガーデン 「のうかちっぷす(柿のチップス)30g」
  「和歌山なちゅるん はちみつレモン味(はちみつ増量タイプ)160g」
- 藤桃庵 「まぜるジャム(イチゴ・はっさく・バニラミルク各40g)」

前期活動

昨年度、近鉄百貨店とのお中元企画第2弾として「九重雑賀」「観音山フルーツパーラー」「藤桃庵」の3社と共同開発した『紀の川アソートセット』を夏にお中元販売と近鉄百貨店和歌山店での店頭販売を行いました。お中元販売において様々な広報活動も行い、商品開発においての取り組みや商品の魅力が伝わるよう尽力しました。また店頭販売では、開発した商品を自分自身の手で販売することは初めてだったので、戸惑いもありました。しかし、お客様とのコミュニケーションを通じ、購入してくださる嬉しさを初めて体験できました。

一方で予想していたよりも商品が売れなかった現場を目の当たりにし、売れる商品を開発することの厳しさを知りました。これらの経験を次年度に生かし、商品開発に励んでいきたいと考えています。

LIVING和歌山 2022年8月27日号に
掲載していただいた際の写真

後期活動

※写真は2023年12月7日に行った
試食段階のものです。

「Patisserie SAVEUR」は和歌山市にあるケーキ屋さんで40年以上地元の方に愛されています。地元の素材を活かしたケーキ作りが特徴的です。比較的リーズナブルな価格でケーキを楽しむことができ、和歌山県内で4店舗を展開しています。
今回の商品のコンセプトは『社会人が手土産として渡すことのできる”焼き菓子”』です。まず、市場調査としてGoogleアンケートを実施しました。その後、SPSSという分析ソフトを利用してどのような焼き菓子であれば売れるのか、味や種類、個数などの点から分析を行いました。その結果と会議を重ね、商品をパイとスノーボールクッキーに絞りました。現在もサブール様と協力し商品開発を進めています。販売予定は4月を予定しています。

和歌山県海南市

大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する

【活動の基本情報】
参加学生数：8 名
（1 年生：7 名、2 年生：1 名）
活動期間：2023 年 5 月～
担当教員：八島雄士、遠藤理一

1. 活動実施の経緯

「げんき大崎」のみなさんは、大崎地区の魅力を海と山が接近した自然環境と港町として栄えた歴史・地理にあると語られます。また、特徴的なつぼ型の大崎湾と泳いで渡ることも可能な無人島（弁天島）は、地区の暮らしを持続的なものとする１つの資源とも考えられています。また、新鮮な野菜や鮮魚等の朝市、食事等を提供できる施設「げんき大崎館かざまち」に加え、一棟貸しの民宿「百船人」も設置されました。地区の皆さんが学生と議論し、若者・よそ者視点の発想からアイディアを出していただきたいという想いでスタートしました。

2. 活動の内容

新たに「大崎地区の歴史・地理と現状を体験的に調べ、暮らしを持続的なものとするためのステップを議論する」ことを目的に、２回生１名、１回生７名が参加しました。サポート教員でも、観光学部教員として着任された遠藤理一先生が加わりました。特に、暮らしに関わる「植物、魚、農作物、柑橘類、食、行事・イベントなど」を要素に、カレンダーの流れでポスターとして可視化するフェノロジーカレンダー作成を提案いただきました。さまざまな活動をするなかで情報収集しました。具体的には、大崎地区住民向けイベント、大崎で事業化されているシーカヤック体験、げんき大崎の夏イベント、地域の歴史的な記録に関わる話し合いなど、９回の現地活動を実施しました。

3. 活動を通じて

初めての１回生が多く、フレッシュな雰囲気でスタートしました。参加した学生の活動意欲が高く、サポート側として大変に助かりました。その成果がフェノロジーカレンダーに現れてきています。次年度には、今年度までの活動の成果を継承しながらも、地域の集まりに積極的に参加しながら、地域の方、学生とともにあるべき活動の形を議論していきたい。げんき大崎の皆様のサポートも手厚く、楽しく良い経験ができました。

4. 成果ポスター

【基本情報】

・海南市とは
　和歌山県の北西部沿岸に位置する人口約5万人の市。
・活動状況
　私たちは海南市の中でも北西にある大崎地区を主な活動地としています
・活動メンバー
　2年生1人、1年生7人の計8人で活動しています。

【活動内容】

宿泊研修

6/19～20日にかけて1年生全員で現地訪問し、19日夜には大崎の皆さんとバーベキューをしながら、色々なお話を聞かせて頂きました。20日にはシーカヤック体験の後、カレーを作りました。2日間ではありましたが、貴重なお話や体験を沢山させて頂き、大崎の魅力に触れることができました。

秋祭り

3年ぶりに区民が集まる大崎の一大イベントで夜店やカラオケ大会、餅まきなどがありました。雨の中での開催ではありましたが、多くの区民が集まり、最後の餅まきでは年齢関係なく餅を奪い合い、大盛況でした。私たちは夜店のお手伝いをさせていただき、区民の方と交流するとともに区民の方々の温かさを感じました。

フェノロジーカレンダー

私たちは、大崎の１年を知ることができるフェノロジーカレンダーを含む、パンフレット作りを行っています。フェノロジーカレンダーは植物・魚・農産物などの項目があり、他にも、大崎の祭りやかざまちカフェについても知ることができるページもあります。昨年度作成したおおさき周遊マップもパンフレットに掲載します。このパンフレットは、来年度に印刷し、和歌山市・海南市内の施設に配架することを目標にしています。

【今後の展望】

来年度は、パンフレットの写真付き完全版を作成・設置するなど、大崎について知ってもらえるような取り組みを行っていきたいです。また、今年度は現地で体験する機会が多く、私たちのアイデアを出す機会が少なかったので、大崎LPPインスタの本格運用やPR動画の作成、イベントの運営など、体験させて頂いたことを踏まえた魅力発信に力を入れていきたいと考えています。

和歌山県海草郡紀美野町
地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生

【活動の基本情報】
参加学生数：13 名
（1 年生：2 名、2 年生：7 名、
3 年生：3 名、4 年生：1 名）
活動期間：2018 年 4 月～
担当教員：山岸大二郎

1. 活動実施の経緯

中田地区にある棚田を再生しようと新たな活動（中田の棚田再生プロジェクト）が開始し、小川地域外からの住民が耕作放棄され荒れた土地を棚田として蘇らせようと活動してきた。高齢化による地域活動の減少、離農による耕作放棄地の増加などの課題を抱えるなか、大学生を含めた様々な立場や世代の方と交流しながら活動を進め、棚田から広がる地域の活性化に取り組んできた。

2. 活動の内容

今年度は、月に一回程度は棚田に訪れて活動し、棚田再生プロジェクトに関わる多様な関係者と交流を深めることにできた。また、地域側から依頼のあった、成果や活動内容を「見せる」ことについて検討すべく、より効果的な SNS 等を活用したプロモーションに向けて、次の三つの活動を行った。まず、SNS 上の棚田の写真の分析を行い、棚田に訪れる旅行者の行動について理解するよう努めた。次に、現地でのアンケート調査を実施し、人々がどの様にして中田の棚田について知り、訪問するに至ったか検討した。さらに、昨年度設置したビューポイントの看板の役割について地域の方からヒアリングし、看板の重要性を再認識したうえで、修復作業を行い景観の維持に努めた。来年度は、調査結果をまとめて、地域側に新たな視点を提供し、中田の棚田再生に繋がるよう取り組んでいきたい。

3. 活動を通じて

棚田という場所で、学生は棚田再生にかかる知識やスキルを身に着けるだけでなく、大学の座学で学んだ専門的な理論や知識を実験的に応用することで、それら専門知識の理解促進につなげてきた。次年度は、プロジェクトの最終年度となるので、これまでの活動の成果をまとめ地域の方々に共有していきたい。

4. 成果ポスター

紀美野町小川LPP

地区×学生による観光・文化・交流
情報発信と棚田の再生

ここが　私のアナザースカイ。

紀美野町小川地区

和歌山県の北部に位置する紀美野町。その中でも壮大な自然に溢れる小川地区。中田の棚田をはじめとした観光地が存在します。
近年、その自然に魅せられ、多くの観光客や移住者が訪れるようになっています。

小川ＬＰＰ

私たちは4回生1名、３回生3名、２回生7名、１回生2名で活動しています。
学生視点での地域振興を目標とし、現地の方々との意見交換などを行いながら、地域の課題解決に向けて活動しています。

田植え(５月)

草刈り(7月)

収穫祭(11月)

2023年度の主な活動

○中田の棚田の再生活動

・棚田内の草刈りや野菜の種まき、木の強剪定など、景観維持のための活動を行いました。

○イベントへの参加、運営補助

・田植えイベントや収穫祭、SAVE JAPANプログラムなどの棚田で開催されるイベントに参加したほか、リバートレッキングや両生類フォーラム等、地域で行われるイベントの運営補助を行いました。

○中田の棚田　看板修復

・昨年度作成した中田の棚田の看板が雨風にさらされて劣化していたため、綺麗に修復しました。

○調査研究部門

・Instagramで「#中田の棚田」と検索してヒットした100件の投稿の写真と文章から、時間帯や天気、私たちが制作した看板がInstagramの投稿にどのような影響を与えるのかを分析しました。

○活動PR部門

・1年を通して、私たちの活動内容を発信しました。その中で、中田の棚田再生プロジェクトが運営している。SNSアカウントとの共同投稿を行うなどし、私たちの活動のPRを主として行いました。また、棚田が発信している情報をどのように得たかなどのアンケート調査を行い、今後の棚田のSNSの運用について検討しました。

イベント補助(12月)

看板修復(12月)

石積み(1月)

Song and Kim (2016)の写真分析フレームワークを応用し、抽出した100件の投稿画像の分析を行った。

※自然風景の写真が最も多くの投稿に使用されていることから、中田の棚田に「自然風景の良さ」を人々は求めていることが分かる。

来年度の活動方針

○月１回以上の現地活動

→昨年よりも地域での活動を大切にし、積極的に地域の方々と活動する。

○地域と学術的連携を深める

→活動の中でアンケート調査・インタビュー調査・参与調査等を行い、得られたデータを共有するなど、地域と連携して研究を進めていく。
→観光学術学会でのポスター発表を目指す。

小川LPP
Instagram

中田の棚田
再生プロジェクト
Instagram

2023年度和歌山大学観光学部LPP合同報告会

和歌山県有田市
ICT の活用による多世代で取り組むまちづくり

【活動の基本情報】
参加学生数：2 名（3 年生：2 名）
活動期間：2023 年 6 月～
担当教員：永瀬節治

1. 活動実施の経緯

有田市箕島地区では、平成 29 年度より有田市社会福祉協議会や箕島地区の地域活動団体である「ワンハート」と連携しながら、多世代交流を通じた地域活性化に向けた活動に取り組んでいる。コロナ禍となった令和 2 年度からはオンラインによる交流機会の創出やワークショップなどに取り組み、令和 4 年からはそれらの成果を活かし、現地でのスマホ講座をはじめとした多世代交流、地域コミュニティの活性化に関する活動を行なっている。

2. 活動の内容

昨年度から引き続き、有田市社会福祉協議会や公民館等との連携により、高齢者を対象に、日々の生活に役立つスマートフォンの使い方を知ってもらう「スマホ講座」の企画運営に取り組んだ。また、6 月の豪雨に際し有田市においても避難指示や浸水被害等が生じたことを受け、新たな取り組みとして、地域の方々と被災時の情報や避難のあり方等を共有する防災ワークショップや、小学生向けの防災まち歩きイベントを企画し、学生たちにとっても防災に関する知識や認識を深める貴重な機会となった。

3. 活動を通じて

今年度は継続して参加する 3 回生 2 名による活動となったが、これまでの経験や地域に関する知識等を活かしながら、地域の関係者との円滑なコミュニケーションを通じて密度の高い活動に取り組むことができた。来年度は新規メンバーの参加にも期待しつつ、引き続き多世代交流を軸として、地域課題の解決に学生なりに貢献できるような活動に取り組む予定である。

4. 成果ポスター

箕島LPP　2023年度活動報告

テーマ「ICT の活用により多世代で取り組むまちづくり」

受け入れ先：有田市社会福祉協議会
メンバー：3回生2人

①防災ワークショップ

6/2の大雨で箕島地区にも、避難指示が出たり浸水地域が発生したりした。その時の情報の受信はどうだったのかという観点から、社協さんと6/29に開催を決めた。当日は、作成していった地図やワークシートを活用し被災者の方のリアルな意見を聞くことができた。ただ、実際に被災していない私たちができることは限られており、ヒアリング・まとめにとどまってしまった。

②スマホ講座

昨年から開催しているスマホ講座も今年度も行った。昨年の反省を踏まえ、内容や担当する人数などに工夫を行った。今年度は、公民館から依頼を受けて実施する形を取った。参加者の事後アンケートからも、講座は好評でニーズは高いことが分かるので、来年以降も継続していきたい。

③防災まちたんけん

1/28に有田市で活動されているマモッチャクラブと一緒に、小学生向けの防災イベントを開催した。「災害時に自分で判断して行動できること」を目標として、クイズやまち歩きを計画した。当日は、防災士の方の解説に小学生も質問をしながら楽しく学ぶことができてよかった。

～今年度の活動を振り返って～

今年度は3回生2人という少人数であることを強みにし、フットワーク軽く活動を行ってきた。特に、地元のグループの方とも協力し活動できたことが良かった。テーマにとらわれ過ぎず、地域や社会の状況に合わせて活動していけることは地域と繋がるLPPとしても良い形だと感じた。
ご協力いただいた皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

和歌山県有田市

青みかん（摘果みかん）の価値を上げる

【活動の基本情報】
参加学生数：18 名
（1 年生：5 名、2 年生：5 名、
3 年生：5 名、4 年生：3 名）
活動期間：2020 年 6 月～
担当教員：岸上光克、永瀬節治

1. 活動実施の経緯

有田みかんの産地である有田市宮原地区では、収穫前にみかんの大きさを揃えるために成りすぎた果実を減らす作業（摘果作業)によって捨てられている「青みかん（摘果みかん)」の価値向上に向けた取り組みを、地域の方々と学生たちの協働による LIP の活動として令和 2 年度より展開している。青みかんを活用した商品開発やその価値を広めるための取り組みを、令和 2 年 3 月に旧駐在所をリノベーションして開設された地域交流拠点「宮原さん家（ち)」をはじめ地域内外でのイベントなどの場を活用しながら積み重ねている。

2. 活動の内容

今年度は、青みかんを活用した商品開発を企業との商品化に向けた準備へとステップアップさせるとともに、これまでも参加してきた宮原町でのライトアップイベント「想繋火」や、あべのハルカスで複数の大学が取り組みを発信する「ハルカス学園祭」に加え、地域の盆踊りや JR の「きのくに線駅マルシェ」での出店も行なった。さらに来年度の活動資金を得るためのクラウドファンディングにもチャレンジし、Web サイトやマスコミ等への記者発表を通じて様々な発信を行なったほか、JICA 留学生とともに早和果樹園での「アグリファンフェスタ」に参加して交流を行うなど、活動密度の高い 1 年となった。

3. 活動を通じて

今年度は継続的に活動してきた上回生と新規メンバーも含め、多数の学生が参加するとともに、活動内容も駅マルシェやクラウドファンディング、JICA 留学生との交流など新たな試みにもチャレンジするなど大きく発展した。一方、参加人数が多く活動内容も多岐にわたったことで、学生のチーム間や地域の関係者との間で互いの動きや活動の方向性を十分に共有できないまま進んでいったこと等、プロセスには課題もあるため、最終年度となる来年度は、活動の柱と目標を当初から十分に共有・議論し、これまでの成果と課題を次のステップへと着実につなげていくことが重要であると考える。

4. 成果ポスター

宮原青みかんLPP活動報告

私たちは有田みかんの生産途中で間引かれて本来捨てられてしまう摘果みかん（青みかん）の価値向上を通した地域活性化を目指して日々活動に取り組んでいます！ 4年目となった今年度は、特に地域の方々に青みかんの魅力や可能性について知ってもらうことを目的に、地域でのイベントの参加に力を入れて活動を行いました。

【想繋火】 7月16日

想繋火とは宮原町における、地域への想いや人との繋がりを大切にし、竹灯籠の灯りとしてライトアップを行うプロジェクトです。想繋火ではイベントの運営、準備のお手伝いと共に青みかんサイダーの販売を行いました。学生も竹灯籠を作成させていただき、貴重な体験となりました！また、学生が考案した商品である"青みかんサイダー"の販売を初めて行う機会でもあり、イベントを通して、沢山の地域の方々と交流をすることが出来ました。

8月13日

【宮原盆BON!!踊り】

8月には有田市宮原小学校で行われている「宮原盆BON!!踊り」に初参加し、想繋火に続いて青みかんサイダーの販売を行いました。今回のイベントでは、大きく目標販売個数を増やし、学生と地域でコミュニケーションを取りながら準備を進めました。結果的には目標個数には届かなかったものの、小学生を含め沢山の地域の方々とお話する機会を得ることができ、自分たちの活動を多くの方にお伝えすることができました！

10月29日

【きのくに線駅マルシェ】

今年度初めて駅マルシェに参加させていただき、青みかんサイダー、青みかんパンナコッタ、青みかん和風ソースを販売しました。たくさんのお客様とお話しながら販売し、私たちの活動や商品に込められた想いなどをお伝えすることができました。今後はレシピの改良をさらに重ね、もっと美味しい商品を販売し、多くの方に青みかんの魅力を感じていただきたいです！

11月17日

【ハルカス学園祭】

今年度も昨年度までに引き続きハルカス学園祭に出展させていただきました！今回は初めて物販ありで出展させていただき、ストラップやリースなどのドライスライス青みかんを使った雑貨を販売させていただきました。足を止めて下さったお客様や他大学の学生の方をお話をするなど交流をすることができ、貴重で有意義な時間となりました！青みかんの活用の可能性の幅を広げるという意味でも、雑貨としての活用の価値や意義を深めていきたいと感じました。

【アグリファンフェスタ】

早和果樹園主催のアグリファンフェスタに参加し、JICA関西の留学生の方々と交流させていただきました。

青みかんについて紹介したり、一緒にみかん狩りを楽しんだり、言語の壁を超えてコミュニケーションをとる貴重な経験ができました！

【商品開発】

青みかんポン酢とスイーツの来年度の商品化実現に向けて、企業の方々と打ち合わせを行っています！

【クラウドファンディング】

来年度以降の活動資金を集めるために、宮原青みかんLPP×地域で、クラウドファンディングを実施しました。テレビ和歌山や新聞各社に取り上げていただきながら、広報活動を行い、目標額には達しませんでしたが、多くの方々からたくさんのあたたかいご支援をいただきました。ご支援くださった皆様、本当にありがとうございました！

【今後の展望】

来年度、宮原青みかんLPPは活動開始から5年目となり、LPPとして活動できる最後の1年になります。今年度に引き続き、地域内外へのイベントへの出店を通した青みかんの認知度向上や、青みかんを使った商品の開発の実現を目標に活動していきたいと考えています！また、これまでの活動を今後どう活かし、継続していくのかを模索していき、地域に還元できるように考えていきたいです。

公式Instagram

@MIYAHARA_MIKAN_LPP

和歌山県有田郡湯浅町
湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！

【活動の基本情報】
参加学生数：5 名
（1 年生：3 名、2 年生：2 名）
活動期間：2023 年 5 月～
担当教員：山岸大二郎、岸上光克

1. 活動実施の経緯

湯浅町は人口 1 万人の小さな町だが、醤油産業発祥や金山寺味噌などの発酵文化、有田みかんなどの柑橘類をはじめとした農作物や、全国でも有名な紀州鴨の養鶏場があり、第一次産業の魅力に溢れている。一方、人口減少が進み、地域の若い担い手不足が課題となっている。地区内の住民だけでは新たな取り組みがなかなか生まれていないのが現状で、地域外の人や若者との接点を増やすことで新たな視点と繋がりが増え、衰退していく地区の新たな取り組みの一歩になると考え、湯浅町の田村地区の若者によって任意団体「田村協議会」がつくられた。今年度よりスタートした本プログラムでは、学生が田村協議会のメンバーと協働で商品開発に向けて活動を行った。

2. 活動の内容

地域おこし協力隊や地域内の若者と連携し湯浅町の新たな商品開発に向けて活動した。今年度は、リサーチ及びマーケティングを地域の起業家から習いながら実践し、ふるさと納税で人気の商品の把握に当たった。調査結果から、肉類が各地域で売れていることを把握し、和歌山の特産牛「和華牛」に湯浅町の金山寺味噌を使ったハンバーグの開発を行うこととなった。その後、ハンバーグのパッケージのデザイン案の検討、OEM 先への依頼など地域の方と協働して行った。来年度は、新商品のリリースを目指し活動していく。

3. 活動を通じて

実際にマーケティングなどの経験のある地域の若者から、マーケティングや商品開発におけるプロセスを学ぶことができた。また、大学での週一回のミーティングを通して、学生間のチームワークを強め、プロジェクトを協働して進めることができた。さらに、地域に足を何度も運ぶことで、地域との連携を深めることができ活動の支援を活動の関係者外からも得ることができた。

4. 成果ポスター

YUASA-CHO LPP

2023年度　LPP合同報告会

2024年2月1日

湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！

活動内容

6月の合宿では、商品を決めるために47都道府県ごとに人気のふるさと納税返礼品をリスト化した結果、ハンバーグを作ることが決定した。7月の合宿では、ハンバーグの試作をした。シラスや金山寺味噌、レモンの皮を混ぜ込んだハンバーグを作り、一番おいしかった金山寺味噌のハンバーグに決定した。そして、販売に向け具体的に販売方法やOEM先、パッケージデザインの方向性を検討した。夏休み明けの合宿では、OEM先への依頼文書作成、特産品補助金申請、パッケージデザイン検討、販売促進のためのアンケート項目作成など販売の準備をし、来年のLPPでやりたいことを話し合った。

それらに加え、週１回のミーティングを開きふるさと納税に関する論文を読んだり、販売に向け各個人ができることをしたりなど、LPPの活動内容をより良いものにすることを目指した。また、主な活動の商品開発以外でもLPPの活動拠点であるFLATのDIYを行ったり、個人でイベントを開催するなどし、地域の方々との連携を強化することに努めた。

今後の展望

来年度の販売に向けて、パッケージデザインや販売方法などを検討していく。そして販売の促進を目指す。その後はフィードバックを行い、ふるさと納税利用者の需要をくみ取りつつ地域の経済や産業の活性化につながる商品の開発をしていきたい。新たな商品の発案も視野に入れて活動したい。また、今年度の活動では湯浅町の住民の方との関わりが少なかったため、今後は地域交流をより深めたいと考えている。湯浅町でのイベントに参加するだけでなく、メンバー全体で運営のお手伝いや企画などの参加も目指したい。

ふるさと納税ジャンル別ランキング

（2023年6月3日現在）

FLAT_TAMURA

湯浅町の概要

和歌山県中部に位置する自然豊かな町。
みかんの生産はもちろんのこと、釜揚げしらすの生産地としても知られている。
また醤油発祥の地として知られ、醤油の醸造蔵や伝建地区を中心に観光地としても人気がある。

湯浅町LPPについて

1回生3人、2回生2人の計5人の少数メンバーで構成される、今年から作られたLPP。湯浅町の農家さん（善兵衛農園の井上様）の声掛けにより始まった。地域おこし協力隊の方とともに合宿やミーティングなどを通して企画を進めている。LPPとしてだけでなく個人の活動として湯浅に行くことも多く、湯浅愛が強い。

LPPメンバー：今岡英穂 伊藤希 郷田聖奈 蓑田彩夏 山本后春

和歌山県日高郡美浜町
美浜町の資源を活かした観光誘客

【活動の基本情報】
参加学生数：23 名
（1 年生：8 名、2 年生：7 名、3 年生：8 名）
活動期間：2023 年 6 月～
担当教員：東悦子

1. 活動実施の経緯

美浜町内外からの誘客を図るために、若者の目線を活かした観光コンテンツの作成やイベントの開催、幅広い人々を対象とした情報発信をすることが求められた。

2. 活動の内容

「イベント班」「インスタグラム班」「パンフレット班」に分かれて活動を進めた。全体ミーティングや班ミーティングにおいて企画を練り、その内容は議事録にまとめてオンライン上で共有した。美浜町役場の方々との打ち合わせや現地視察も行った。

イベント班は、12 月 2 日に子供を対象とした「クリスマスイベント」を開催した。他の班のメンバーも協力し、松ぼっくりのツリーや煙樹ヶ浜の石アートなど地域にあるものを活用した工作ブースを運営した。インスタグラム班は、美浜町の景色等の発信やイベントの告知を担い他班の活動をサポートした。またリサーチ機能を用いて調べたところアメリカやカナダからの投稿も見られ、次年度は英文での投稿も計画している。パンフレット班は、紀伊日ノ御埼灯台に特化したパンフレットの作成に取り組んだ。イラスト、写真、説明文を用いて灯台の歴史や周辺地域の生き物等も紹介し、幅広く関心を喚起する内容とした。各班とも準備段階では随分と悩みながらも活動をやり遂げた。一方課題も見いだし、2024 年度の取り組みに活かそうとしている。新たな展開が期待される。

3. 活動を通じて

前年度からの継続メンバーと新規メンバーの連携及び異学年が共に活動することによって、学生達は主体的に活動に取り組めた。継続メンバーはリーダーシップを発揮し、新規メンバーはそれに応じて協力を惜しまず、次につながる経験を積むことができた。年々、学生達の美浜町への愛着が深まっている様子がうかがえた。学生を支えてくださった美浜町役場の田中敦之様、森千花様、山口剛様、カナダミュージアム館長の三尾たかえ様やスタッフの皆様に感謝申し上げたい。

4. 成果ポスター

2023年度 美浜町LPP

美浜町について

和歌山県日高郡の町である。主な観光目的地としては煙樹ヶ浜キャンプ場、日ノ御埼灯台、西山ピクニック緑地、カナダミュージアムがあげられる。煙樹ヶ浜の松林は、全長約4.5kmにおよび、近畿最大の規模を誇る。三尾地区からは明治時代に多くの人がカナダに出稼ぎに行ったことから移民の町としても知られている。

イベント班

2023年の夏休みに開催した小学生向けのイベントの第二弾として、今年度は12/2にクリスマスイベントを開催した。地元の小学生が参加し、サステナビリティを意識したオーナメント作りや煙樹ヶ浜の石を使った石アート、そしてクリスマスにまつわるクイズを行った。カナダミュージアムの館長様にはメープルクッキーの出張班場でご協力いただいた。参加者からは「親子でゆっくり楽しむことが出来た」「新たな学びがあった」という好評と共に、「風が強い」「寒すぎる」という改善点も見られた。今回の反省を活かし2024年度は秋にイベントの実施を検討している。

パンフレット班

日の岬エリアにある、紀伊日ノ御埼灯台について幅広い方々に知ってもらうことを目的に、灯台についてのパンフレットを作成している。灯台の歴史といった基本的な情報から、灯台周辺に季節ごとに現れる生き物などについても記載を予定しており、幅広い方々をターゲットとしている。今年度末の完成及び発行を目標に、現在パンフレット班9人で作成を進めている。

インスタ班

インスタ班はSNSをもちいて美浜町の魅力発信を行っている。各班の活動の状況をストーリーで流したり、冬に実施したイベントの告知も行った。他にもインスタグラムのリサーチ機能を使って私たちの投稿がどの国、どの年代の方に多くみられているのかの分析も行った。美浜町は移民の町として有名なことから、カナダやアメリカなどの海外の方からのリアクションや閲覧も見られた。このことから英語表記のタグ付けや投稿の文章も英文を入れるなどアイデアが出ており、2024年度から実施していきたい。

AMEMURA_W

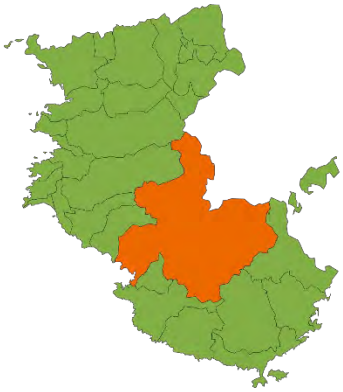
今後の活動について

美浜町は2024年の10月に合併から70周年を迎えるそうだ。私達もこのアニバーサリーに即してより美浜町の魅力を発信していきたい。今年度は去年と比べて大幅に人数が増えたことで、仕事の割り振りや企画の進行がうまくいかないことが多かった。2024年度は班同士の情報共有を重点的に行い、人数が多くても協力しあえる体制づくりを心掛けたい。

参考文献：美浜町HP http://www.town.mihama.wakayama.jp/docs/2014011800175/

和歌山県田辺市龍神村地域

「林業×地域」の再発見による
地域将来ビジョンの策定とシナリオプランニング



【活動の基本情報】
参加学生数：11 名
（1 年生：5 名、3 年生：3 名、4 年生：3 名）
活動期間：2021 年 5 月～2024 年 2 月
担当教員：大浦由美、佐々木啓

1. 活動実施の経緯

龍神村地域は、県下でも有数の林業地であるが、田辺市との合併以降、人口流出が続き、高齢化も進行している。本地域の維持・発展のためには、地域随一の資源である森林資源の活用は不可欠である。そこで、林業だけでなく、より多様な林産物や森林空間の活用等を含め、現場に学び、「森林･林業を活かした地域将来ビジョン」の作成とその実現方策の検討･提案を目指し、2021 年度から活動を開始した

2. 活動の内容

(1) 林業・特用林産物に関する事前学習　(8/28)
(2) 現地視察およびヒアリング（ 9/27-28、11/20、11/30）
(3) 地域住民の方々を交えたワークショップ（1/20）
(4)現地報告会、意見交換（2/4）：これまでの活動をまとめ、3 年間の集大成として報告する。
上記以外にも、事後学修やミーティング、ワークショップや報告会の準備を行ってきたほか、本 LPP の活動は FM TANABE や紀伊民報等のメディアにも取り上げられた。

3. 活動を通じて

地元中高と地域産業の事業者、そして和歌山大学が連携した「地域塾」によって交流を創出することが、龍神村の林業を次世代につなげていくことに寄与できるのではないかという「地域塾構想」が龍神村の将来ビジョンとして提案された。また、本 LPP への参加が契機となって和歌山県の林学職等に就職した学生もこれまでの 3 年間の活動の中で複数名おり、活動を通して、現地に身を置き、林業・地域について知り・学んだことがこのような進路選択にも影響を与えたと考えられる。

4. 成果ポスター

2023年度 龍神LPP

加藤・小西・林・岡田・落合・築地
岩田・北村・長野・三浦・宮下

「林業×地域」の再発見
～森林・林業を活かした地域将来ビジョンづくり～

龍神LPPでは林業がさかんな龍神村の「将来ビジョン」を地域の方たちと考え、プロジェクトの集大成として龍神村の地域愛を育む方法を林業と掛け合わせて提案していきます。

今年度は林業について事前学習を行い木材の伐採から販売までの現場を見学し、龍神村の中学生とこれからの龍神村のついて意見交換を行いました。

今年度の現地学習

第1回、第2回の現地実習では、木材市場や森林組合の見学をはじめ、地元で林業に関わる皆さんからサカキなどの特用林産物とスギ・ヒノキの複合林業や原木シイタケの栽培、「半農半林」についてお話をお聞きしました。第3回の現地実習では龍神中学校に訪問し、生徒の皆さんにヒアリングをしたところ「龍神は好きだが、仕事がないから出ていくしかないのではないか」などの声を聞き、ビジョンづくりのヒントを得ました。

ワークショップを振り返って

ワークショップでは、私たち大学生が今までの3年間を踏まえて考えた地域塾構想について発表させていただいた後、ワークショップに参加してくださった龍神村のお三方と、地域塾構想の実現性を高めるためのワークショップを行いました。話し合いの中ではかなり具体的な運営についてや、中高生や住民の方たちへのアプローチなど、私たち大学生だけでは考えが及ばなかった部分まで討論が及びました。2月4日の龍神村での最終報告会に向けて構想をより良くしていきます。

龍神村の将来ビジョン

龍神村を将来ビジョンを考える中で、「未来の地域を担う人材」である村内の子供たちに注目し、将来に向けた取り組みの具体案として「地域塾」構想を提案しました。

地域塾を通して、地元の中学・高校と地域産業、和歌山大学が連携し、大人が地域の子供たちに職業知識を教えるだけでなく、子供たちが大人に新たな視点やアイデアを与える「学び合い」の交流から、龍神の林業を次世代へ繋げていくことができるのではないかと考えました。

活動スケジュール

日付		活動
8月	28日	事前学習
9月	27・28日	第1回現地学習
10月	10日	振り返り学習
11月	10日	事後学習
	16日	事後学習
	20日	第2回現地学習
	30日	龍神中学校訪問
1月	20日	ワークショップ
2月	4日	成果報告会

2023年度　和歌山大学観光学部LPP合同報告会

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町
中山間地域における地域ハブ（HUB）の役割と可能性を考える

【活動の基本情報】
参加学生数：3 名
（1 年生：1 名、2 年生：1 名、3 年生：1 名）
活動期間：2023 年 6 月～
担当教員：八島雄士

1. 活動実施の経緯

色川地区は、40 年以上前から移住者受入を地域主体で行ってきた中山間の集落です。 9 つの区からなる地区の HUB（ヒトやモノが集まり、交流が生まれる場所）となっている「らくだ舎」を中心に、①山里コミュニティのいま、②棚田などの地域資源や伝統的行事などの価値、③学生ができること、④中山間地域を残していく術（残していく必要があるのか含め）などを議論しながら考えることを活動の主眼としました。

2. 活動の内容

事前学習では、色川地区の歴史やらくだ舎を運営する想いなどを共有し、訪問する準備としました。現地訪問では、らくだ舎視察のほか、買い物や食事に来られた方たちと会話ができました。特に、訪問した 6 月は梅の時期で、梅ジュース作りや梅拾いなどを、他の地域からお手伝いに来られた方たちと交流しながら体験できました。また、10 月には、小阪区の宮祭りに準備から関わりました。小阪区は今でも地域行事が残っており、実際の雰囲気を肌で感じながら、行事を継続する意味などを考える機会となりました。11 月には、那智勝浦町内で開催された全国棚田サミットで、色川地区が出店したブースのお手伝いをしながら、全国から来られた参加者と交流しました。最後に、1 月には小阪区の燦々会（交流・食事会）で活動報告しました。

3. 活動を通じて

今年度は 3 名（1 回生、 2 回生、 3 回生、それぞれ 1 名）のメンバーで実施しました。コロナ禍で途絶えていた燦々会での交流がようやく再開されました。また、地域に棚田があることの意味や、維持するための大変な労力を、身をもって知ることができました。結果として、らくだ舎という「場」はもちろんですが、訪問した学生そのものが地域の方たちをつなげる HUB の役割を果たしているのではないかと思いました。

4. 成果ポスター

和歌山大学観光学部　地域連携プログラム（LPP）2023

那智勝浦町色川地区

中山間地域における地域ハブ（HUB）の役割と可能性を考える

和歌山大学　和歌山県 那智勝浦町

色川地区について

那智勝浦町色川地区は、那智勝浦町の中心部から山間部へ車で30分ほど走った所に位置する、9つの区から成る、人口が300人ほどの小さな地域です。かつて盛況していた鉱業が1970年代に廃止となり、地域の人口は外部へと流出していきました。しかし、同時期より外部からの移住者を積極的に受け入れ、現在では地区全体の人口のおよそ半分を移住者が占めるまでになりました。ただ、LPPの活動を主に行っている小阪区は、他区と比べ移住者は少なく、その代わり地域の行事や風習が比較的残っている地域となっています。
地域資源としては、美しい棚田や茶畑が有名です。特に「小阪の棚田」は、一度休耕田となった棚田を移住者を含む地域住民が主体となり再興させ、現在も関係人口の方々などを交えた保全活動が定期的に開催されています。

LPP活動について

2016年度から活動を行ってきた那智勝浦町色川地区におけるLPPは、色川ならではの行事や風習への参加（フィールドスタディ）を通し、学生の知見を深めることを中心に活動を行ってきました。また、活動を通して「学生が感じたこと」を地域住民に発表する場を設けることで、住民のいわゆる「鏡効果」醸成にも寄与してきました。
2023年度は、これまでの活動をベースにしつつ、棚田などにまつわる地域の課題解決に向けた具体的なアクションを起こすことで、地域の課題を「自分ごと」にする取り組みも予定していました。

活　動　報　告

今年度は昨年度よりも現地に行く回数を増やすことができました。地域の伝統行事に参加したり、棚田サミットに携わったりしたことで、たくさんの人との関わりを持つことができました。現地の方々の那智勝浦町色川地区に対する思いを実感することができ、中山間地域について深い学びを得られました。
来年度は今年度の学びを活かし、地域ハブの役割を明確化する活動と可能性を見出す活動を積極的に行いたいと考えています。

らくだ舎訪問

6月4日に顔合わせを兼ねて色川よろず屋・らくだ舎訪問を行いました。らくだ舎で提供される料理の食材には色川産のものを積極的に使う、らくだ舎に訪れた人々と近い距離で交流をするなど色川ならではの特色が見られました。色川で人と人を繋ぐ大きな役割を果たす場所であると感じました。

宮祭り参加

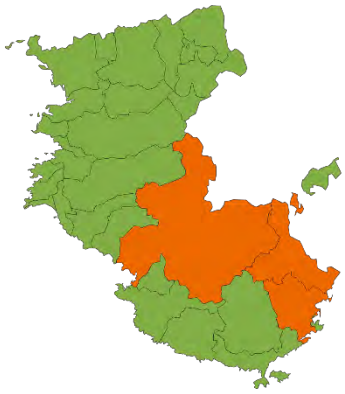
宮の倉庫に保存されている資料を見せてもらいながら今の色川地区に至るまでの経緯を住民の方に説明していただき、色川について深く知ることができました。宮祭り後に行われた交流会にも参加し住民の方との交流を通して棚田や集落の現状についても知り中山間地域についての理解が深まりました。

棚田サミット

11月18日、19日の2日間にわたって、全国棚田サミットが那智勝浦町で開催されました。私たち学生は、1日目は色川の特産品の販売や分科会の参加、2日目は引き続き特産品の販売、そして、しめ縄づくりや餅つき体験のお手伝いをさせて頂きました。全国各地の棚田保全に関わる方と交流ができ、とても貴重な経験になりました。また、開催地となった色川の方からのお話も聞くことができ、このイベントの本質について考えることが出来ました。

和歌山県新宮市、田辺市本宮町、東牟婁郡那智勝浦町

世界遺産登録 20 周年プレイベント
世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、
熊野を盛り上げよう。



【活動の基本情報】

参加学生数：13 名

（1 年生：8 名、2 年生：4 名、4 年生：1 名）

活動期間：2023 年 6 月～

担当教員：佐野楓

1. 活動実施の経緯

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録 20 周年を 2024 年に迎えるにあたり、世界遺産に対する理解を深めるとともに、地域事業者との交流等を通じて地域課題を理解し、20 周年を盛り上げる事業を立案する。

2. 活動の内容

事前学習では熊野地域の知識や課題を学んだ。現地学習では全体で世界遺産について講和等で詳しく学び、現地体験及び観光事業者との交流等を行った。事業の案出しを行った。現在の事後学習では現地学習の内容をブラッシュアップし成果物として残すことや、PR ツールの作成を行っている。

3. 活動を通じて

現地実習においては、新宮・本宮・那智勝浦の 3 つの地域に分かれ活動した。共に熊野古道の世界遺産 20 周年イベントを盛り上げる、京都産業大学と熊野観光協会の方々との顔合わせも兼ねての取り組みであった。活動の中で、熊野三山の土地についての見解を深めることができた。また、地域の方から熊野古道に対する思いも、取材を通して知ることができた。特に印象的だったのは、熊野古道を地元住民が日常的に散歩コース等として利用していることだ。住民たちからも、かけがえのない存在として愛されていることが読み取れた。また、最終報告会に向けての準備を進めるにあたり、印象的だったのは、現地実習に参加した者と参加できなかった者との視点の差だ。現地実習に参加した者は、自身が体験したことを元に「現地実習では、ガイドさんが〇〇が有名だと言っていたから組み込もう」といったような、熊野を巡り歩いた経験から出た意見が多く出ていた。しかし、参加しなかった者は上記の意見とは違い「このお店は以前テレビにも出ていたから取り込んだ方が良い」といった、行った者が忘れがちになる視点から切り込んでくれることが多くあった。これは、ある意味熊野に対しての印象がまっさらであるからこそ得られた意見だと感じた。この意見は、全体の考えが行き詰まった際、新鮮な視点を得るきっかけにもなった。

4. 成果ポスター

熊野三山LPP

メンバー　中村　華奈子・佐々木　そら・佐藤　静香・大木場　柊哉・新田　きらり・竹田　夢彩　・林　華音
・青木　太誠・藤井　里美奈・高原　優那・西田　かのん・飯島　颯大・藤井　里美奈・森本　千慧

熊野三山LPPってなに？

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年を2024年に迎えるにあたり、若年層の世界遺産に対する理解を深めるとともに、地域事業者との交流等を通じて地域課題を理解し、20周年を盛り上げる事業を立案する。

事前学習では熊野地域の知識や課題を学び、“どの街で何に着目して学習するのか”現地学習の目的を定めると共に班分けを行う。

現地学習では全体で世界遺産について講和等で詳しく学び、他大学を交えた 各班で現地体験及び観光事業者との交流等を行う。最終日には現地での学びや 地域活性化に寄与する内容をまとめ発表する。その後、世界遺産20周年の事業の案出しを行う。事後学習では現地学習の内容をブラッシュアップし成果物として残すことや、来年度事業のPRツールの作成を行う。

現地研修の内容(新宮市アクテビティ班)

○1日目(9/5)
- 熊野那智本宮大社
- 熊野本宮大社周辺

○2日目(9/6)
- 新宮曼荼羅絵解き
- 世界遺産三社巡り

(ガイドさんに同行していただきました)
熊野川舟下り、熊野川温泉さつき

○3日目(9/10)
- 高野坂と三輪崎散策

(ガイドさんに同行していただきました)
- レンタサイクルで新宮市散策
  (浮島の森など)
- 蓮の木の滝

○4日目(9/11)
- 課題ブラッシュアップ

2班の企画内容

デザイン案

メダルデザインについて

熊野三山20周年記念賽銭メダル

コンセプト

現地研修で熊野を訪れた際、お賽銭を入れる機会が多くあった。しかし、参拝する側の多くは、「お賽銭を投げ入れる」という作業のみで、終わってしまうのではないかと考えた。
→お賽銭を特別な体験に！
お賽銭という行為は一人でも容易にできず、誰かと一緒にたくさんできあがる企画のあり方を考えた。そこで賽銭を思い出作りとなるよう「賽銭メダル」を考案した。

賽銭メダルの概要

神社等でお賽銭を用いた記念メダルを販売する。メダルは思い手によってデザインが異なる仕様となっている。
→思い手は交通安全、身体健康、心穏成就縁結び、学業成就の中から選び、裏面は対してデザインが設定している。お賽銭としてお賽銭箱に入れることも、大切な記念に持ち帰ることも利用者の自由としている。

収益点

アイデア自体は熊野に訪れる賽銭者が参拝に対応ではあった。しかし、記念メダルや販売は効率に伴う予算から難しい。販売は難しい状況となってしまった。また、関係団体への許可や説明、一部通しての製造スケジュール等が不明瞭で、明確にする必要性があった。今回の事業計画で学生の参加する事業だけでは事業として対応することは難しく、より魅力のある見通しを立てることが重要であると認識した。

PR方法

インスタグラム等の投稿での発信やSNSなどの電子広告としての発信を中心に対応していく。

1班の企画内容

まち歩きデジタルスタンプラリー

コンセプト

実地研修で熊野を訪れた際、この地域の熊野三山だけでない市街地の魅力に気づいた。しかしそれと同時に、「まち歩きがしにくい」という課題も見つかった。
そこで私たちは「この課題を解決し、より多くの人に熊野の熊野三山だけでない市街地の魅力も知ってほしい」という思いのもと、この企画を提案した。

概要

「SPOTTOUR」というアプリを利用し熊野三山近辺の地域限定でデジタルスタンプラリーを実施すると同時に、デジタルスタンプラリーと連動した学生オリジナルマップの作成・配布を行う。
集めたスタンプの数に応じ、参加者へ記念品の提供や優待商品が当たる抽選への参加権が付与され、旅がお得になる仕組みを用意する。
また、プロモーションとして「#SANMANGOKU」というタグを用いたInstagramへの投稿や、協力店舗や顧客にクーポン券の呼びかけを行う。

課題解決に向けた取り組み

熊野地域の「まち歩きがしにくい」という課題の解決に向けた取り組みもこの企画の中で実施する。
まず、熊野地域には既存のマップのデザイン性や所中の看板の少なさから「所全体の構造が見えづらい」という現状がある。これに対し、手書きイラストで理解しやすく親しみのあるデザインのオリジナルマップを学生が作成し配布することや、マップ・SNSにおすすめの周辺ルートやお店の住所等の詳細情報を掲載するなどの取り組みで解決を目指す。
また、熊野地域には「まち歩きをするきっかけが少ない」とも感じた。これに対し、記念品や優待商品の当たるスタンプラリーを実施し、その中で熊野の魅力ある歴史が見える仕掛けとして歴史のある場所ではクイズ形式でスタンプを押す仕掛けを用意するなどし、観光のきっかけを作る取り組みを行うことで解決を目指す。

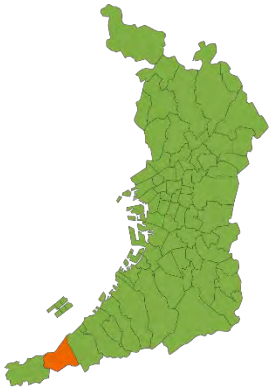
今後の活動

今後は学生で街歩きマップの作製や記念品の用意に加え、企業に協力してくださる店舗の拡大とSNSに投稿するための準備を行っていく。

今後の展望

①企画の実施・運営
→オリジナルマップ作成のため熊野に対する知識を深めていく。新メンバーやリーダーの交代などに備え、引き継き事項をまとめたり共有したりしておく。
②他団体との連携強化を図る
→京都産業大学・熊野観光協会の2つの団体と連携した取り組みであるため、互いの情報共有が不可欠である。オンライン会議やこまめな連絡を取ることで足並みを揃え、円滑な運営を行っていく。

大阪府阪南市
阪南市の産業振興と魅力発信



【活動の基本情報】
参加学生数：6 名
（1 年生：4 名、2 年生：2 名）
活動期間：2023 年 6 月～
担当教員：佐々木壮太郎

1. 活動実施の経緯

阪南市での活動は 2018 年度から続けており、今年度より新しいテーマでの活動となる。阪南市は、観光資源は豊富にあるが、その良さが PR しきれていない現状があるため、今年度はその掘り起こしを外部、若者の視点で実施するという趣旨での活動となる。

2. 活動の内容

若者視点で阪南市の魅力を掘り起こし、その魅力を多くの人に発信する活動を行なった。
①対面・オンラインでのミーティング
②阪南市の魅力を知るためのまち歩き
③匠の ippin オープン記念イベントへの参加
④はんなん産業フェアへの参加
⑤SASSY 阪南市での観光モデルコースの作成（まとめマップ、観光ルート、等）
⑥SNS での宣伝活動（ショート動画、等）
⑦情報発信活動のための現地取材、等

3. 活動を通じて

コロナ禍の影響もほぼ落ち着いたことで、対面とオンラインを上手に組み合わせて使うだけでなく、イベント参加等の現地でのさまざまなリアルな活動機会を増やすことができた。また今年度は、阪南市と株式会社 RelyonTrip との連携による観光・飲食アプリ「SASSY」のプロジェクトにも参画し、観光ルートの作成やそれの SNS を用いての情報発信といった新しい取り組みに挑戦することもできた。これらの経験から得られた知見や気づきを、今後の学生生活に活かしていってほしい。

4. 成果ポスター

阪南市LPP2023年度活動報告

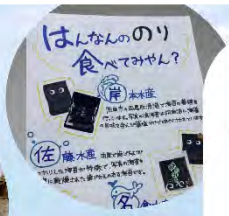
◇活動目的

1. 阪南市とは？
   阪南市は大阪府南部の泉州地域に位置していて、海と山に囲まれた豊かな自然やその自然を活かした多くの食の地域資源・文化がある魅力ある街

2. 課題
   阪南市は観光資源は豊富にあるが、その良さがPR しきれていない
   様々な視点から阪南市の魅力を掘り起こしていきたい

▼

その阪南市の魅力を多くの方に発信するために
まずは阪南市の認知度を高める必要がある
様々なSNSを通じて大学生の視点から阪南市をＰＲ



◇阪南市のイベント参加

1. 匠のippinオープン記念イベント
   阪南市商工会議所がリニューアルされ、匠のippinとして阪南市の物産品の販売を行う産直市が開かれる
   そのオープン記念イベントに参加し、一部企画の補助なども担当

2. はんなん産業フェア
   阪南市商工会が実施する地域活性化事業に参加
   匠のippinで一部の阪南市の特産物を紹介するPOPを制作
   SASSYで掲載する観光ルートのデータを集めるため、インタビューを実施

◇SASSY

SASSYの開発会社RelyonTrip、阪南市商工会・市役所、和歌山大学が共同し、阪南市の魅力を伝えるSNSを中心としたプロジェクトを開始

1. 阪南市の観光ルート作成
   大学生向けの阪南市の観光ルートを３つ作成
   それぞれ阪南市LPPが考えた観光マップとしてSASSYに掲載予定

2. SNSでの宣伝
   LPPの活動の取り組みを動画にし、各SNS(Instagram、TikTok、Youtube、X)で投稿
   LPPという活動を広めると同時に、若い世代をターゲットに阪南市の魅力を発信

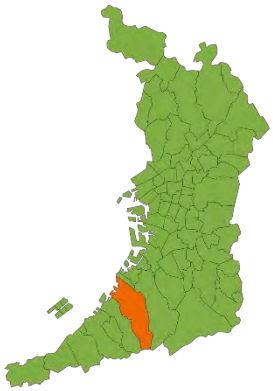
SASSYとは？

おでかけ・旅行企画アプリ。全国10万件以上のおすすめスポットが掲載されていて、写真・お店情報・口コミがアプリ内ですべてみることができる！

Instagram▼　TikTok▼

大阪府岸和田市

景観資源活用による景観意識の向上と地域の賑わい・活性化への貢献



【活動の基本情報】

参加学生数：10 名

（1 年生：2 名、2 年生：5 名、3 年生：3 名）

活動期間：2021 年 5 月～2024 年 1 月

担当教員：堀田祐三子

1. 活動実施の経緯

2021 年度、2022 年度に引き続き、市民の景観意識の向上と地域への主体的な関与を目的とする「岸和田市こころに残る景観資源発掘プロジェクト」によって選定された景観資源の利活用として、ウォーキングイベントの企画・運営を行う。それに伴う景観資源の調査を通じて、景観資源の観光資源化を目指す。

2. 活動の内容

定期的に集まり、岸和田市役所都市計画課の方に助言をいただきながら、ウォーキングイベントの内容、ターゲット、広報方法についてミーティングを行った。イベントに向けての準備は広報班、デザイン班、コンテンツ班に分かれて行った。広報班は広報先の策定と広報文章の作成、デザイン班はチラシ・配布冊子・マップの作成、コンテンツ班は謎解き・クイズ・デジタルスタンプラリーの作成を担当した。11 月 12 日に景観資源を謎解きとともに巡る「ぶらり岸和田景観なぞときラリー」を開催した。去年の反省を活かし、スタートを南海岸和田駅前・南海波切ホール 1 階、ゴールを南海岸和田駅前と、わかりやすい場所に設定した。当日はそれぞれの中継地点に分かれ、謎解きと景観資源にちなんだクイズを出題した。運営資料を作成し、各中継地点での作業の流れを事前に把握していたため、混乱せずに運営を行うことができた。どんチャカフェスタと同時開催ということもあり、南海岸和田駅前から 66 人、南海浪切ホール前から 109 人の、計 175 人の参加があった。

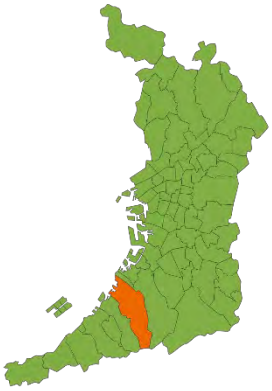
3. 活動を通じて

配布物の作成、クイズや謎解きの作成を通して景観資源や岸和田市についての理解が深まった。イベントでは多くの地域の方とコミュニケーションを取ることができ、開催側としても楽しい時間になった。イベントの企画・運営全体では去年の反省点を多々活かすことができ、満足度の高いものになった。

4. 成果ポスター

岸和田市 × 関西大学
ぶらり岸和田
景観なぞときラリー
～進め！わくわく発見隊～
岸和田市景観LPP
野田和貴・青木真結・浅田歩実・古賀彩・廣川剛彦
石田彪我・城七海・若野有紗・増井隆乃輔
岸和田景観LPPとは？
私たちは、大阪府岸和田市に多く存在する景観資源を広く市内外へPRすることを目的に、岸和田市都市計画課の方々と連携して活動しています。昨年度に引き続き「こころに残る景観資源発掘プロジェクト」として、毎年市民から募集した景観資源を有効活用するためのウォーキングイベントを企画・実施しました。
イベント概要と成果
11月12日に「ぶらり岸和田景観謎解きラリー」を開催しました。景観資源をより多くの方に知っていただくため、謎解き・クイズ・デジタルスタンプラリーを楽しみながら景観資源を巡る、ウォークラリー形式のイベントを企画しました。どんチャカフェスタと同時開催ということもあり、当日は175名の方に参加していただくことができました。
広報班の活動内容
・大学内各所でチラシの設置
・岸和田市内でチラシの設置
・観光学部HPでイベントの紹介
コンテンツ班の活動内容
STAMPED!
・謎解きの作成
・クイズ、ルートの作成
・デジタルスタンプラリーの作成
デザイン班の活動内容
・チラシの作成
・配布物の作成
ウォークラリーをどこで知ったか（計30人）
～岸和田市景観LPPアンケート調査～
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
イベントチラシ
広報岸和田
現地で知った
HPやSNS
その他
景観についての関心が高まった
100%
イベントの満足度
83.3%
私たち岸和田景観LPPは3年間にわたり、大阪府岸和田市に多く存在する景観資源を広く市内外へPRすることを目的に、岸和田市都市計画課の方々と連携して活動してきました。活動を通して、イベントを計画し運営することの難しさ、そして、岸和田市の美しさや温かさを知ることが出来ました。
Mamiko Hori

大阪府岸和田市
古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。



【活動の基本情報】
参加学生数：10 名
（1 年生：8 名、2 年生：1 名、3 年生：1 名）
活動期間：2023 年 5 月～
担当教員：竹林浩志

1. 活動実施の経緯

岸和田にある空き家問題の対策や地域経済の発展、地域人材雇用の拡大、地域の担い手の創出、地域イメージの向上を目指して、2022 年春から活動を始めた団体「岸和田古眠家 Base（KKB）」は、古民家仲介事業、古民家データバンク事業、企業支援活動、ロケ地データバンク事業、飲食事業、複合施設経営、学生建築デザイン支援、寺子屋、勉強会・ワークショップの開催、古民家活用の人材育成、古民家マルシェなどのサービスができないかと考えていますが、まだ実践には至っていません。

2. 活動の内容

古民家活用を目指す組織の活動（イベント・ミーティング）に実際に参画してもらうことで、ただ単に情報を収集するだけでなく、地域の方々とのコミュニケーションからも現状を把握してもらい、活動のあり方・方向性、現状の問題点・課題について考えていただく。それによって学生にとっては地域におけるイベントの企画・運営・意思決定の実際や今後の展望等をリアルに体験することができ、地域側にとっては、活動に際しての新たなる発想や知見が獲得できると考えている。

3. 活動を通じて

学生の時間の都合もあったが、地域の方々の協力もあり積極的に活動に関われたものと理解している。その意味においては、学生は、実際の活動に参加することで、運営側の方々や参加者の方々と多くかかわり、多くのコミュニケーションをとることができ、現実の地域活動の難しさがある程度理解できたのではないか、と考えている。

4. 成果ポスター

岸和田古民家LPP
～内畑町から広げるコミュニティ創出によるまちづくり～

和歌山大学観光学部

山崎莉奈　岡本和歌子　柴川真凜　新里海織　大工千佳
永吉美結　野條莉湖　深津美羽　柳瀬薫奈　山本采佳

ブックフェスタ　料理づくり

「KISHIWADA BOOK FESTA 2023」の一環として、10月15日に「**大学生が作る！１日古民家ライブラリー～人とつながる物語～**」を開催しました。

このイベントでは「絵本に出てくる料理に挑戦！」と題して、第一部では絵本「しろくまちゃんのほっとけーき」に出てくるパンケーキと、追加でおにぎりを作りました。第二部では、第一部で残ったホットケーキミックスを活用し、たこ焼き器でベビーカステラを作りました。訪れてくださった地域の方々と料理を楽しむことが出来ました。

ブックフェスタ　絵本づくり

「KISHIWADA BOOK FESTA 2023」の一環として、10月15日に「大学生が作る！１日古民家ライブラリー～人とつながる物語～」を開催しました。

このイベントではつどいの場「たんぽぽ」にて紙の種類から綴紐の色まで選べるオリジナル絵本作りを行いました。
訪れてくれた地域の人から貴重なお話を聞くこともできました。

いきいき100歳体操▷

地域の人へのヒアリング

◎「地域交流の場カフェ山滝」

９月26日に岸和田市で定期開催されている「地域交流の場カフェ山滝」に参加し、地域の課題を知るためのアンケートを実施しました。
アンケート結果から、空気が澄んでいてのどかである、交通の便が良くない、などの自然の面での良し悪しや、同年代と定期的に交流はあるが世代の異なる人との交流が少ないことが分かりました。地域の人々同士の交流を肌で感じることができた貴重な機会となりました。

◎「いきいき100歳体操」

11月22日に内畑町会館で開催された「いきいき100歳体操」にも参加をし、そのあと地域の方々から直接お話を伺いました。町内ではどのような活動があるのか、あったら嬉しいイベント、趣味など次回のイベント開催の手がかりとなるようなお話を伺うことができました。

また、地域住民の方々の間でも住民同士のつながりが薄くなっていることを感じていらっしゃるようで、地域のリアルな現状を知ることができました。

◁ヒアリング
（2023年11月20日）

これからの活動

・マップづくり
→地域の方の憩いの場となる場所等をまとめていきたいと考えています！

・地域の方との関係づくり
→地域の方のニーズを把握するためのヒアリング調査を行うことを計画しています！

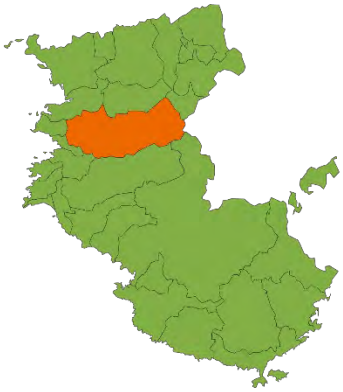
@KISHIWADA_KOMINKA_LPP

・SNSを活用した情報発信
→活動の様子・イベントの成果等を中心に、発信していきたいと考えています！
イベント開催時にはお知らせもしますので、ぜひフォローお願いします！

2023年度 和歌山大学観光学部LPP合同報告会

wakayama univ.

和歌山県有田郡有田川町
学生との協働による棚田保全・集落支援活動



【活動の基本情報】

参加学生数：11 名

（1 年生：3 名、2 年生：6 名、3 年生：2 名）

活動期間：2011 年 7 月～

担当教員：大浦由美

1. 活動実施の経緯

有田川町での第19回全国棚田（千枚田）サミット（2013年度）開催決定をきっかけに、2010 年に県が企画した「棚田モニターツアー」に当時の観光学部生約 20 名が参加した。地域の農業者の高齢化とともに耕作放棄地が増加する当地の現状を目の当たりにして、学生側から「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、学内で棚田保全ボランティアへの参加者を募り、「棚田ふぁむ」を結成。2011 年 7 月から活動を開始した。

2. 活動の内容

下記の、ほぼ全ての現地活動を実施することができた。

5 月 19 日：全体ミーティング	11 月 12 日：現地活動（草刈り）
5 月 21 日：現地活動（田植え）	12 月 1 日：全体ミーティング
6 月 15 日：第 1 回リーダー会議	12 月 6 日：第 5 回リーダー会議
7 月 10 日：全体ミーティング	12 月 9 日：地元交流会資料作成
7 月 12 日：第 2 回リーダー会議	12 月 10 日：現地活動（地元交流会）
7 月 15 日：現地活動（山椒収穫支援）	1 月 10 日：第 6 回リーダー会議
7 月 16 日：現地活動（山椒収穫支援）	1 月 21 日：現地活動（天神祭）
8 月 2 日：第 3 回リーダー会議	1 月 29 日：合同報告会ポスター作成
9 月 24 日：現地活動（稲刈り）	2 月 1 日：合同報告会（1）
10 月 8 日：現地活動（秋祭り支援）	2 月 2 日：合同報告会（2）
10 月 10 日：LPP 参加学生交流会	
11 月 1 日：第 4 回リーダー会議	

4. 成果ポスター

有田川町 LPP 棚田ふぁむ

活動地域：有田川町沼地区
活動目的：棚田の保全活動、集落の活性化

中山間地域に広く存在する「棚田」は、故郷の原風景として、また環境保全や文化・歴史的遺産としての観点から、近年価値が見直されています。その一方で、農家の高齢化や後継者不足は深刻であり、年々耕作放棄地が拡大している実態で、沼地区もそんな地域の一つです。

そんな中で私たちが目指していることは「地域の寿命を少しでも延ばすこと」私たち大学生が定期的に沼地区を訪れ、住民の皆さんと交流することで集落に活気をもたらすことができたらと願い、日々活動しています。

5/21 田植え・草刈り

今年度の最初の活動は毎年恒例の田植え。

沼地区の皆さんが私たちのために用意してくださった田んぼに稲の苗を植えました。田植えの後は草刈り機を使い公民館の付近の雑草を刈りました。初めて使う草刈り機に苦戦しながらも、地区の皆さんに手取り足取り教えていただきながら作業しました。

7/15-16 山椒収穫支援

収穫の繁忙期のお仕事を支援します。

沼地区は山椒の産地として有名な場所です。膨大な数の山椒の実を手作業で一つひとつ収穫することは非常に大変な作業であり、収穫シーズンは毎年お手伝いをしています。この日私たちが収穫した山椒も商品として出荷されることになります。

9/24 稲刈り・獣害柵の見回り

5月に植えた稲はまさかの全滅。無念。

5月に私たちが植えた稲は獣害によって荒らされてしまい、別の田んぼで稲刈りをさせていただきました。午後からは獣害から農作物を守るために地区を囲っている獣害策の見回りのお手伝い。梅雨の大雨で破損した場所を修復しました。

10/8 秋祭り

地元の恒例行事「餅まき」に参戦！

沼地区の恒例行事である秋祭りに参加しました。地区の文化である餅まきのための餅の袋詰めから作業を開始。雨天のため屋内での実施となりましたが、棚田ふぁむのメンバーも餅をまきました。秋祭りの後は交流会で住民の皆さんと交流を深めまることができました。

11/12 農業支援と地区の環境整備

沼地区の秋の味覚を堪能！

まずは雑草と伸びすぎたすすきを草刈り機で刈り取る作業から開始。そのあとは秋の味覚である柿を収穫させていただきました。午後からは公民館付近に生い茂っていた竹の伐採作業をお手伝いしました。かぼちゃも頂きましたよ！

12/10 地元交流会

沼地区の未来を考える交流会でした。

沼地区の皆さんと公民館に集まって交流会を行いました。交流会では今年１年の棚田ふぁむの活動を振り返り、沼地区の未来を考えるワークショップも行いました。昼食には自分たちで作った焼きおにぎりと地元の食材をふんだんに使ったお弁当を頂きました。

1/21 天神祭

「餅まき」再び。今回は屋外で。

沼地区の毎年の恒例行事である天神祭に参加しました。まずは餅まきのための餅を準備し、神社に奉納した後は、地域の皆さんと一緒に餅まきに参加。今回は棚田ふぁむのメンバーも餅をまきました。祭りの後は地域の皆さんの打ち上げに参加し交流を深めました。

和歌山県西牟婁郡白浜町

白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズにあったサービスの企画開発

【活動の基本情報】

参加学生数：16 名

（1 年生：10 名、2 年生：6 名）

活動期間：2023 年 6 月～

担当教員：佐野楓

1. 活動実施の経緯

白浜町は、コロナ禍前まで年間約 350 万人の観光客が訪れていた。しかし、コロナ禍を境に観光客が急激に減少し、白良浜などの白浜町内の海水浴場の訪問者数が減少し、売店の利用者、購買金額が減少していた。そこで、観光客を呼び戻し、経済を活性化させるために、2023 年の夏に海水浴場を訪れた観光客のニーズを調査し、海水浴場で販売するメニューの検討などを実施する。

2. 活動の内容

5 月から 7 月にかけて、白浜町内の海水浴場で観光客を対象に調査するアンケートの質問内容を検討した。7 月から 8 月にかけて、白浜町を訪問し、アンケート調査を行ったほか、(一社)南紀白浜観光協会が運営していた露店での食品販売などを体験した。9 月からはアンケートの集計を行い、観光客の傾向やニーズをまとめ、1 月より来年度の商品開発に向けて、具体的な販売商品案を考案している。

3. 活動を通じて

白浜町は関西有数のリゾート地、温泉地であり、周辺地域に比べ以前から観光客が多い地域である。観光地として知られている白浜町をさらに盛り上げ、訪れた人がいかに満足できる観光地にするかというハードルの高いことを学ぶことが出来たと考える。アンケートを通じて、観光客と交流をすることができ、白浜町の観光の現状について体験を通じて学ぶことが出来た。また、膨大な量のアンケートを集計することで、様々な意見を知ることが出来た。さらにそこから白浜を訪れる観光客の動向を知ることが出来たため、来年度に向けて、若者受けする商品案を考えることが出来た。

4. 成果ポスター

白浜LPP

2023

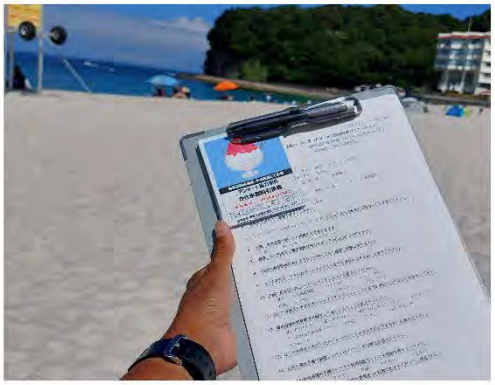
2023.02.01

[制作]
観光学部
白浜LPP

今年度の白浜LPPの活動内容

アンケート調査実施

7月～8月にかけて3グループに分かれ、白良浜にてアンケート収集を行いました。アンケート内容は主に年代や交通手段から、求めている商品などについて回答して頂きました。



このアンケートを元に、商品開発を行う運びとなりました。

商品開発の検討

アンケートの結果から、私たちと年齢が近い若者をターゲットに、和歌山県のフルーツを使った映え志向の商品の開発を検討しています。詳細や連携する業者の方などは今後は南紀白浜観光協会の方を中心に今後話し合って、来年度の商品提供につなげていく予定です。

これからの白浜LPP

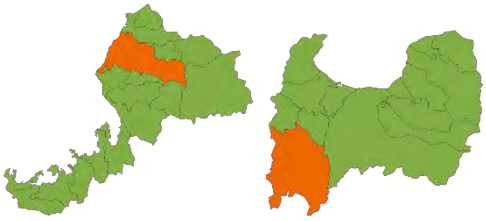
来年度の活動方針

◆3月業者選定
今年度、南紀白浜観光協会と話し合った結果をもとに和歌山県の名産を使った若者向けの商品を作るべくその条件に合った企業の方々を選び関係を築きます。

◆7～8月販売
実際に現地の白浜海水浴場で販売活動を行います。

◆9月に集計
販売した商品がどの層に、どのくらい人気なのかをデータにまとめます。

福井県福井市および富山県南砺市
北陸カレッジ 2023



【活動の基本情報】
参加学生数：16 名
（1 年生：9 名、2 年生：6 名、3 年生：1 名）
活動期間：2023 年 5 月～2024 年 1 月
担当教員：木川剛志、佐々木啓

1. 活動実施の経緯

JR 西日本と北陸三県の自治体と大学が協力して行う産官学連携事業「北陸カレッジ」に参加した。各地域の課題を踏まえて、若者視点を活用した地域活性化、旅行需要の喚起、学生の成長機会の創出を目指すプロジェクトである。和歌山大学が担当した自治体は福井県福井市と富山県南砺市だった。この企画はこれまでも継続的に和歌山大学観光学部として参加してきたものである。

2. 活動の内容

参加学生は、5 月 28 日に北陸 3 県の自治体からプレゼンを受け、その中から希望を提出することになり、他の大学と重なった場合は抽選となる。その結果、担当する自治体二つが決まり、それぞれの学生の希望に基づいてわかれた。それぞれの自治体と交流し、事前学習を始め、その成果を 7 月 15 日に他大学との合同で開催されたキックオフミーティングで発表した。その後、福井市班は 9 月 19 日～21 日、南砺市班は 10 月 7 日～9 日に現地実習を行った。その成果は、11 月 18 日に中間報告会が実施され、12 月 18 日には大阪グランビアホテルにて成果報告会が行われた。

3. 活動を通じて

和歌山大学は 2016 年ごろからカレッジに参加してきたが、今年まで一度も主要賞を受賞することはなかった。今年はようやく福井市班が主要賞である「優秀賞」をはじめて受賞することができた。他大学がゼミを中心とした 3 年生、4 年生が中心であることを考慮すれば、これは快挙である。また南砺市班も非常に面白い企画を組み上げていたので、この活動を通じて、大いなる学びがあったと考えることができる。

観光学部においては実践的な学びが重要であり、本プロジェクトのように産官学の連携がはかられ、社会実装の仕組みがあるものは今後も続けていくべきと考える。

4. 成果ポスター（福井市班）

4. 成果ポスター（南砺市班）

和歌山県和歌山市
雑賀崎の観光スポットの情報発信と空き家の利活用

【活動の基本情報】
参加学生数：7 名（1 年生：3 名、2 年生：4 名）
活動期間：2022 年 4 月～

1. 活動実施の経緯

私たちは、2019 年度にコンテスト参加のため発足した雑賀崎での活動を、より実践的に行うため昨年度から L 活として活動している。昨年度の活動を生かし、地域住民の方々や地域団体と協力して、イベントの実施や空き家対策に向けての活動を行った。

2. 活動の内容

今年度の雑賀崎 LPP では、空き家利活用に向けたイベントの企画・運営補助や、和歌山県の空き家モデル事業に参加した。１０月に雑賀崎地域の NPO 法人、さいかざきポッセが主催する「リターンさいかざき」というイベントの運営補助を行った。その中の企画の１つである、灘の浜で回収した海ゴミを用いたアート作品の製作といった企画を学生で考え、実行した。若者が雑賀崎に愛着を持ってほしいという思いを込めたこの企画は多くの小学生が参加し、好評の声をいただいた。同様に 2 月にもイベントが開催される予定であり、そこで旧正月をモチーフとした凧揚げの製作を行う予定である。

和歌山県の空き家モデル事業にも参加し、さいかざきポッセをはじめとする地域住民の方々と雑賀崎の空き家の活用方法について議論・調査を行った。まず、雑賀崎の認知度調査のために外国人観光客をターゲットとしたアンケート調査を高野山で実施した。次に、雑賀崎地域の空き家の現状を把握するため、聞き取り調査をもとに「空き家マップ」を作成した。さらに、作成したマップをもとに空き家の利活用に関する事例を学びつつ、点在する雑賀崎地域の空き家について、県・さいかざきポッセ・住民の方々と意見を出し合いながら今後の利活用方法について検討した。

3. 活動を通じて

活動を通じて雑賀崎の魅力だけでなく、空き家の現状や課題についても理解を深め、活動の発展につながる学びを得ることができた。今後は観光客・住民が共存できるような地域づくりを行っていきたいと考える。

4. 成果ポスター

和歌山市雑賀崎 LPP

雑賀崎の観光コンテンツの発信と空き家の利活用

① 雑賀崎 LPP の概要

活動経緯や雑賀崎の魅力

雑賀崎 LPP は２０２２年度より発足した LPP であり、今年度は雑賀崎地域の NPO 法人である「さいかざきポッセ」や和歌山県の職員の方、雑賀崎に住む方々のご協力のもと、活動を行ってきた。

雑賀崎ＬＰＰでは、少子高齢化が進行するこの町を、観光まちづくりで活性化させ、若者に親しんでもらえるような町にすることを目的としている。

昨年度までは主に雑賀崎地域を知り、地元住民と観光客の共存方法についての活動を実施していた。今年度は雑賀崎の特徴である空き家の多さに注目し、活用方法について意見を出し合ってきた。

雑賀崎は和歌浦を構成する町の１つである。建ち並ぶ家々の並びがイタリアのアマルフィに似ていることから、「日本のアマルフィ」と呼ばれ、イタリアとの親交も深い。その象徴として、旧雑賀崎小学校跡地に地域の方によりつくられたレモンの丘には、レモンが植えられている。

雑賀崎の魅力ポイント

レモンの丘、トンガの鼻、雑賀崎灯台、立ち並ぶ家々、漁船から直接魚を購入できる「はたうり」など・・・

雑賀崎 LPP の活動内容

- L活（学生主導型）として活動。
- 週一回程度のミーティングを実施。
- メンバーは１回生３人２回生４人。

② 活動内容

空き家モデル事業への参加

雑賀崎のアンケート調査

外国人観光客をターゲットとし、アンケート調査を実施。雑賀崎の認知度や漁村地域への関心を調査。雑賀崎地域や美浜町三尾に関する知名度や訪問意向の情報を得ることができた。（結果は下記参照）三尾地域は本宮大社で実施。

空き家マップの作成

雑賀崎地域には空き家が多いという現状を受け、地域住民の方に聞き取り調査をしたり、実際に外観を見て回ったりしながら１枚のマップにまとめた。使用可能な空き家や空き地などそれぞれ色分けを行った。

ワークショップへの参加

11 月、1 月と２度参加。ＳＷＯＴ分析等を通して雑賀崎地域の強み・強みを再認識しつつ、それらを生かした具体的な事業計画と収支計画を考えた。空き家利活用のノウハウを中心に学ぶことができた。

空き家モデル事業とは？

空き家を活用したまちづくりプランを作成するための和歌山県のモデル事業。具体的な事業の提案を行い、次年度以降、実運を継続していくことを目的とする取り組みである。雑賀崎と美浜町三尾地域の２箇所で実施。

イベントの企画・運営補助

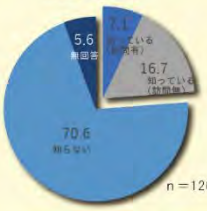
10 月に NPO 法人さいかざきポッセが主催する「リターンさいかざき」というイベントの運営補助を行った。灘の浜で回収した海ゴミを用いたアート作品の製作といった企画を自分たちで考え、実施した。
2 月のイベントでも子供向けの企画を実施予定。

目的

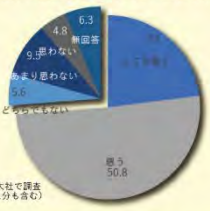
子供たちに雑賀崎の良さを知ってもらい、好きになってもらうことで将来も雑賀崎に残ってもらう。若者によって町を活性化させたいといった町の方の意向も込めて計画した。

予定の作成

雑賀崎の認知度



他方の農漁村を訪問したいと思うか



n＝126（本宮大社で調査した分も含む）

高野山で実施したアンケート調査によると、雑賀崎の認知度はまだまだ低いが、改善の余地は十分にあると考えられる。

雑賀崎を知っていて実際に訪問したことがあると答えた方の割合は 7.1%。
雑賀崎を知っているが訪問はしたことが無いと答えた方の割合は 16.7%
高野山・本宮大社に訪れた外国人観光客で、雑賀崎について知っている人は 23.8%である。

7 割以上の人が雑賀崎を知らないが、漁村地域に訪れてみたいと考えている人は、73.8%である。
外国人観光客にどの様なところに魅力を感じるか尋ねると、漁村地域特有の自然環境・釣り・食文化等が多く挙げられたため、これらのコンテンツを生かすことが出来れば、観光客を誘致していくことができる。

③ 活動を通じて

今年度の活動について

空き家の利活用について考えたり、地域の方々と交流したりすることによって、雑賀崎の魅力だけではなく、空き家の現状や課題など様々な問題点も見えてきた。今年度は、それらについて理解を深め、来年度につながる学びを得ることができた。

次年度以降の活動について

今年度は雑賀崎の空き家に関する現状や課題を知ることができたため、次年度からはより実践的な活動に入っていく。
若い世代で雑賀崎が賑わう、そんなあたたかな場所を作り、空き家問題を解決するための一歩となる活動を行っていく予定である。

5. 空き家ワークショップについて（雑賀崎 LPP）

（1）概要

日時：11 月 24～26 日　1 月 19～21 日

開催場所：ガッドブル

主催者：和歌山県空き家定住移住推進課・和歌山社会経済研究所の方々

計 6 日にわたるワークショップでは、今年度実施した高野山でのアンケート調査やマップ作り等から得た結果を用いた雑賀崎の強み・弱みの分析や雑賀崎をより良い地域にしていくための取り組み等を話し合い、運用していくにあたっての費用計算を行った。2 グループに分かれ、雑賀崎住民の方々と学生双方からの観点で意見を出し合った。株式会社エンジョイワークス様が行っているものをはじめ、多くの空き家活用事例を学び、雑賀崎のエリア再生に必要な仕掛けのアウトプットを作成した。

（2）成果

①雑賀崎の住民の方が営む、既に空き家改装が進行しているお試し居住施設の具体的な施設利用方法や運営費用、付随するプランを考えた。

②雑賀崎にある空き家を用いた観光客が滞在できる場所や魚をさばくことのできる場所、コインロッカー等雑賀崎に必要な機能を具体的な事業に落とし込んだ。それらの収支計算も行い、実現可能かどうかが可視化できた。

（3）学生のフィードバック

・今回作成した資料を基に、来年度の雑賀崎 LPP の空き家利活用を行っていきたい。

・LPP でプロジェクトを行っていく際にも、一つ一つ計画を練る必要があり、情報収集も行いたい。

・まちづくりの難しさを知った。具体的な事業にまで落とし込んでいくことができたが、実際に雑賀崎に訪れる人を増やすためには内からの取り組みをもっと増やしていくべきである。

3. LPP 参加学生交流会 2023 の実施

LPP に関する 5 つのテーマについて、グループディスカッションを行った。各テーマにはファシリテーター（リーダーを務める学生が担当）が付き、参加学生 5～8 名のグループに分かれて 7 分間の意見交換を行う。グループは事前に組分けし、いくつかのプログラムから数名ずつが混合した構成となっている。ファシリテーターを中心に、学生の意見を付箋に書き出し、模造紙に貼付することで意見交換の活性化を目指した。

■ 当日のディスカッションテーマ

①各 LPP の会議の取り組み方について

②地域や学生、学生同士、担当教員とのコミュニケーション、連絡の取り方について

③LPP でのこの半年間の学び、気づき、参加して役立ったことについて

④どのような地域づくりを目指して活動しているか

⑤学生のモチベーションについて（モチベーションを保つための工夫など）

⑥地域との関わりの中で意識していること

開催日時：2023 年 10 月 10 日（火）、11 日（水）両日とも 16 時 40 分～17 時 50 分頃
会　　場：和歌山大学 西 4 号館 T-101 教室、
来場者数：10 日（火）学生 25 名
　　11 日（水）学生 38 名

地域連携プログラム（LPP）での学びの共有と発展を目的とした、LPP参加学生の交流会を開催します。
交流会では、LPPに関する6つのテーマについてグループディスカッションを行います。
2023年度の折り返し、この半年間までの活動の振り返りや、今後の活動、地域との関わりについて、プログラムの垣根を越えて考えてみませんか？

和歌山大学観光学部 地域連携プログラム

LPP参加学生交流会 2023

日時：2023年10月10日（火）、11日（水）
いずれも16時40分～17時50分（予定）
＊16時30分～受付開始

会場：西4号館 T101教室

■ LPP参加学生の皆さんは、いずれかの日程にご参加ください。
・出席、欠席にかかわらず、9月26日（火）23:59までに、
右記QRコードから出欠を入力してください。
詳細は、Moodle「LPP（地域連携プログラム）」をご覧ください。

■ Lゼミ参加学生（1～3年生）は、本会への参加時間を
LPPの単位認定時間として算入してください。

LPP参加者交流会2023 参加確認フォーム

お問い合わせ先：
和歌山大学観光学部 観光実践教育サポートオフィス（西4号館 2階 K216室）
TEL 073-457-8553 E-mail t-local@ml.wakayama-u.ac.jp

tourism

4. 2023 年度 LPP 合同活動報告会の実施

2023 年度に実施した LPP の活動報告について、その取り組みを広く共有し、学生が活動を振り返り、自身の学びと今後の活動のブラッシュアップを図るため、「2023 年度 LPP 合同活動報告会」を実施した。本報告会は、各プログラムのリーダーを務める学生が中心となり、企画、運営をしている。当日のプログラムについては次頁を参照のこと。

開催日時：2024 年 2 月 1 日（木）、2 日（金）両日とも 16 時 30 分〜18 時 35 分頃
会　　場：和歌山大学 西 4 号館 T-101 教室、
　　1F エントランスホール、2F 多目的スペース
主　　催：和歌山大学 観光学部
来場者数：1 日（木）学生 56 名、教職員 14 名、一般 19 名
　　2 日（金）学生 79 名、教職員 12 名、一般 16 名

1）発表について

各プログラムが作成したポスター*を掲示しながら、参加学生による 5 分間の活動報告の後、 3 分間の質疑応答を行った。参加者および学生からの発表内容に対する意見や感想は、報告後の質疑応答タイム及び交流会で行った。また、Microsoft フォームズを併用し、ご意見、ご質問の収集にあたった。回収したご意見等は、各プログラムのリーダーに共有した。

*発表の際使用したポスターについては、各プログラムの活動報告（本誌 P.12〜P.49）参照のこと。また、

2023年度

LPP合同活動報告会

tourism

和歌山大学観光学部の「地域実践型教育プログラム」

2023年度に実施した全18プログラムの参加学生が一同に会し、活動報告を行います。
学内だけでなく、受入自治体など学外関係者の皆様のご参加を歓迎いたします。
LPPを通した貴重な交流の機会です。皆様のご来場をお待ちしております。

2024年

2月1日（木）
2日（金）
16時30分～18時35分
（予定）

和歌山大学　西4号館（和歌山市栄谷930番地）
T-101教室、1F エントランスホール、2F 多目的スペース

LPP（地域連携プログラム）とは

地域活性化に関心を持つ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携して地域が抱える課題の解決を目指すプログラムです。
地域住民は生活者の視点から、学生は「ヨソ者」の視点から意見を出し合い、ともに活動を行うことで、双方にとって新たな気づきの機会となることがLPPの特徴です。

※ 2022年度より、「地域インターンシップ・プログラム（Local Internship Program, LIP）」から名称を変更し、新たな枠組みでスタートしました。

主催：和歌山大学観光学部

お問い合わせ先：
和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510　和歌山市栄谷930
TEL／FAX　073-457-8553／073-457-8586　E-mail　tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp

2023年度LPP合同報告会 プログラム

2024年2月1日（木）、2日（金）16時30分～18時35分頃

■受付

16:30～16:45　受付（2F 多目的スペース）

■2023年度 LPP合同報告会

16:45～17:00　開会あいさつ・主旨説明（T101教室）

17:00～17:55　LPP活動報告（ポスターセッション 報告時間：8分、転換：2分）
発表場所
A：1F エントランスホール、T-101教室前方
B：2F 多目的スペース、T-101教室後方

	2月1日（木）		2月2日（金）	
	A	B	A	B
17:00～17:08	**海南市** 大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する	**有田市（箕島）** ICT の活用による多世代で取り組むまちづくり	**有田市（宮原）** 青みかん（摘果みかん）の価値を上げる	**白浜町** 白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズにあったサービスの企画開発
17:10～17:18	**和歌山市（加太・磯の浦）** 加太・磯の浦エリアにおける観光映像を活用した地域振興	**美浜町** 美浜町の資源を活かした観光誘客	**那智勝浦町** 中山間地域における地域ハブ（HUB）の役割と可能性を考える	**北陸カレッジ（南砺市）** 北陸カレッジ 2023
17:20～17:28	**紀美野町** 地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生	**熊野三山** 世界遺産登録20周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、熊野を盛り上げよう。	**大阪府岸和田市（古民家）** 古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。	**北陸カレッジ（福井市）** 北陸カレッジ 2023
17:30～17:38	**湯浅町** 湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！	**有田川町（棚田ふぁむ）** 学生との協働による棚田保全・集落支援活動	**大阪府阪南市** 阪南市の産業振興と魅力発信	**大阪府岸和田市（景観）** 景観資源活用による景観意識の向上と地域の賑わい・活性化への貢献
17:40～17:48	**和歌山市（雑賀崎／L活）** 雑賀崎の観光スポットの情報発信と空き家の利活用		**田辺市龍神村** 「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョンの策定とシナリオプランニング	**紀の川市** 紀の川市の新商品開発プロジェクト

17:55～18:25　交流会（各LPPブース）

18:25～18:30　講評（T101教室）

18:30～18:35　閉会あいさつ（T101教室）

・ご来場の際はまず受付（2F 多目的スペース）にお越しください。
・活動報告は各ブースにて行います。ご自由に移動してください。
・エントランスホールおよび多目的スペースでは、各プログラムの成果物や活動地域の特産品、パンフレットを展示しておりますのでぜひご覧ください。
・報告後、交流会の実施を予定しております。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

２）発表の実施報告

本会では、各報告時間に 2 プログラムずつ、別のエリアで発表を行った。当日の振り返りと報告のため、後日、各プログラムの発表の様子や、アンケートフォームで回収したご意見・ご質問に対する回答をまとめた報告書を参加学生が作成した。

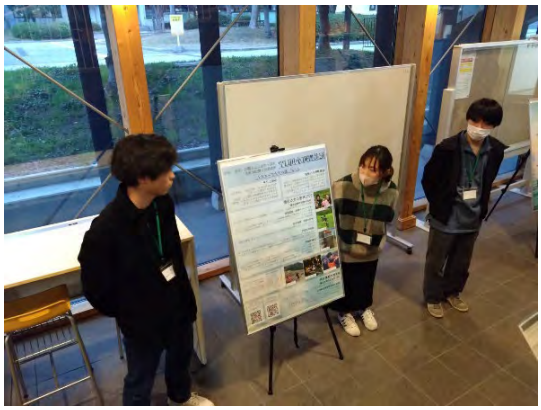
和歌山県和歌山市

テーマ：加太・磯ノ浦エリアにおける観光映像を活用した地域振興
報告に関して 私たちの LPP は 3 年目の最終年であったにも拘らず、何ら成果物を残すようなことは出来なかった。特にこの合同報告会においては、LPP の活動の難しさについて問題提起をした発表を中心に行った。要因は発表中にも述べたように、行政・企業・学生の連携不足と相互間でのモチベーション低下・他事業/他のプロジェクト等による学生の優先度の低下など様々である。その中で、私が唱えたことは「受け入れる側の主体性・地域の主体性」の重要性に関してだ。私たちのような外部の人間が、行政・企業と手を組み何か地域に影響を齎すことは、住民自治機能の低下を招く要因になりかねない。住民ありきのまちづくり・観光地づくりにおいて、住民の存在を考慮しないことは非常に危機感を抱くべきであると考える。多くの LPP が行政連携による活性化を行うが、その姿勢に対して一度踏みとどまって考えることの重要性を提起する発表づくりを意識した。 コメントシートの意見への回答 Q:地域の声を聴くような仕組みづくり・総合的判断をすべきではなかったのか ―　LPP の趣旨は「地域との継続的関わりによる活性化づくり」であると理解している。総合的判断に基づく LPP の方向性の転換等も視野に入れて活動すべきであるとの助言を頂いたが、一部営利企業との関係性を深めることは、間接的な地域活性に繋がるかもしれないが、総合的に見た際に「地域住民」の存在が浮き出ている状態となり、「地域の中心」を無視した状況に値するのではないだろうか。助言いただいた内容は、1 つの手段であるが直接的な地域との関係づくりに大きく影響を齎すかは不明である。 もちろん、私たちは活動において成果が乏しいため理想論に過ぎない。助言を頂けることに感謝申し上げるが、関係者の皆様含め LPP 活動に携わる皆様が「相互の目標」を共有し「共通目的」を設定することで、よりよい LPP 活動が出来ると考える。皆様には是非、「立ち止まって考える事」をして頂きたいと思う。 Q：連携の意味を考えるべきではないか ―　「連携＝学生の出来る範疇を超えられる」というのは、その通りであると認識している。しかしながら、頼る・頼られるの関係性は継続的に関わることで出来る「信頼関係」の賜物であり、学生と受入団体の双方の積極的な関与・姿勢が重要であると理解している。私どもとしても、非常に不甲斐ない結果に終わり、反省しているところである。今後も活動される学生・関係者の皆様は、良好且つ積極的な関係構築に努めて頂きたいと考える。

和歌山県紀の川市

テーマ：紀の川市の新商品開発プロジェクト
報告会では前期活動と後期活動に分けて報告しました。前期活動では昨年度開発した商品の販売を行いました。後期活動では Patisserie SAVEUR 様とコラボし「社会人が手土産として渡すことのできる焼き菓子」をコンセプトに市場分析を行い商品企画を進めてきました。完成した商品の発売は 2024 年 4 月を予定しています。年間の活動を通して課題を見つけ、次年度の目標を「論理的に物事を捉える、根拠をもって提案する」というように設定しました。 報告会での質疑応答をもとに掲載いたします。 Q：後期活動の商品企画にあたってアンケートを実施したとありましたが、どのような形態のアンケートを実施したのでしょうか。 A：Google のアンケートフォームを用いて作成したものを SNS を用いて手土産を買う世代である親世代を対象に実施しました。そこで得た回答を Excel に写しそこから SPSS を用いて分析を行いました。

和歌山県海草郡紀美野町

テーマ：地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生
他のプロジェクトの年間の活動報告等を聞く貴重な機会であるため、どのプロジェクトのブースも学生や受入地域の方々を含めた多くの人であふれていたように感じる。紀美野町小川地区 PP のブースでは、受入地域の方々が多く訪れていただいたこともあり、発表後の意見交換がとても活発に行われた。地域の方々と今年度の活動を振り返りながら、学生と地域の関わり方について考えを共有した。また、発表に関してもスムーズに行うことができ、たくさんの質問をいただいた。その中では、1 年間の活動で何を得たかに対して、自分たちが成長していく様子を実感し、試行錯誤の結果が現れていく様子を知れたことが活動の成果であると伝えたほか、データの分析から見えた今後の展望としては、季節別のデータの数をみれば冬が少なかったため、冬に人々が来るようなイベントや目的が必要だと考えた。また、LPP の継続においての課題については、アクセスの悪さなどから途中から来なくなる人が多いことを挙げ、最初から地域の方々と関係を作り、定期的に参加する雰囲気を作ることが重要であると感じ 

た。加えて、フォームには、LPP としてできることを行っている方針が、地域貢献に繋がっているのではないかとの好評な意見をいただいた。メンバー間での活動意欲の偏りに付いての指摘もあったが、プロジェクトとしてもその点は課題に感じており、次年度は全メンバーが意欲的に活動に参加できるような仕組みを検討していきたいと感じた。

プロジェクトとして 1 年間の活動を客観的にふりかえることができるよい機会であり、他のプロジェクトの活動を知るなどして刺激を受けることができる機会でもあった。加えて、受入団体の方々とも密に意見交換をする機会にもなった。この報告会でいただいたご意見や指摘、また私たち自身が得た知見等を活かし、次年度も積極的に活動をしていきたい。

和歌山県有田市

テーマ：ICT の活用による多世代で取り組むまちづくり

交流会では、小学生を対象とした防災イベントやワークショップの実施について関心を持って頂き、内容や大変であった点等についての質問を頂いた。「LPP の活動についてあまりよく知らないが、和歌山出身であるため聞きに来た」、というシステム工学部の関係者の方とお話しする機会があった。私たちの地域での活動に関心を持ち、ポスターもじっくりと見ていって下さった。その際、地域の方や観光学部生だけでなく、大学内の多くの人に観光学部の LPP という活動を知ってもらう機会があればよいな、と感じた。また、講評では、大浦先生に箕島 LPP についてお言葉を頂くことができ、今年度も頑張ってきてよかったと深く感じた。

昨年度と比べて沢山の地域の方も来てくださり、学生と地域の方が意見交換や交流をする姿が多くみられた。私自身も他 LPP の活動報告を聞き、大人数ならではの運営方法や、企画立案方法等参考になる点が多くあった。私自身、リーダーとして参加する活動報告会は 2 回目であるが、これまでの活動を共有し、他の学生が生き生きと地域で活動している様子を見ることが出来る報告会は私たち自身のモチベーションの向上にもつながり、非常に有意義な時間であると感じている。LPP の魅力を多くの学生に知ってもらい、より多くの学生が地域での充実した活動を行ってほしいと思う。

和歌山県有田市

テーマ：青みかん（摘果みかん）の価値を上げる
報告では、今年度の目標として地域の方々に青みかんの魅力や可能性について知ってもらうことを目的にイベント出店に力を入れて活動を行うことを掲げていたため、一年間を通して取り組んできた 4 つのイベント出店についての内容をメインに発表を行いました。各イベントの活動内容と、感想や今後に向けた展望などを発表し、一年間の総まとめとすることができました。 コメントシートの質問への回答を掲載させていただきます。 Q. 青みかんの価値向上を通した地域活性化とのお話でしたが、生産途中で捨てられてしまうみかんの価値を向上させることと地域活性化がうまく繋がらないのではないかと感じたのでどのように活用して地域活性化を目指されるのかをお聞きしたいです。またなぜ青みかんに注目されたのですか。完成品の有田みかんの更なる地位向上でなかった理由もお聞きしたいです。 A. 地域交流の場をつくることや地域の課題解決の糸口となるきっかけとして青みかんを取り上げ、青みかんの商品化や青みかんを使ったイベントの実施を通した地域活性化を目指しています。 有田みかんは近年耕作放棄地の増加がみられ、気候変動の影響もあって生産量も減少傾向にあります。持続的なみかん産業のために、新たなみかんの価値を見出すこと、青みかん活用モデルによるリスク分散が必要であると考えたことから青みかんに注目した活動を行っています。

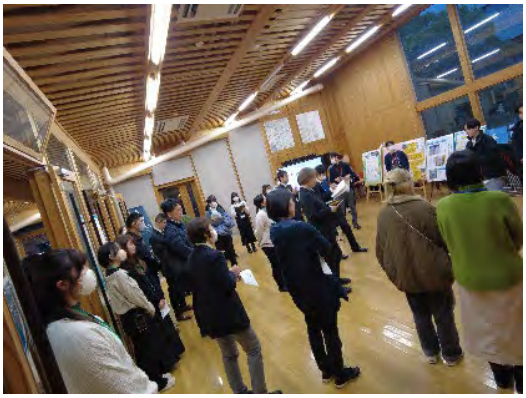
和歌山県日高郡美浜町

テーマ：美浜町の資源を活かした観光誘客
報告では、私たち美浜町 LPP が主として行っていた、3 つのチームの活動について報告しました。イベント班が企画した、子供向けのクリスマスイベントに関して、コンテンツ班が行った、紀伊日ノ御埼灯台のパンフレット作成では、インスタ班が行った、情報発信及び閲覧者情報の分析などについて報告させていただきました。特にパンフレット作成については、興味を持ってくださる方が多く、どのように作成しているのか、どのくらいの期間作成に要したのかといった事についても、私たちの経験からお話することができたと思います。 以下、コメントシートにあった質問・コメントです。 ・インスタを更新する頻度はどのぐらいですか？→今年度は不定期でした。特にクリスマスイベントの前後は、イベントの PR も兼ねて多くの発信を行いました。 ・活動がチームごとにやって異なるので、動画などでまとめておくと振り返りなどができて良いのかなと思いました。→今年度は人数が多く、様々な活動を行うことが出来たので、ポスターでは一部しかお話が出来ずすみません。もし来年度以降もこの体制が続けば行ってみたいと思います。

和歌山県田辺市

テーマ：「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョンの策定とシナリオプランニング
プログラムが今年で終了となる龍神 LPP では、今後の活動の形についての質問をいただきました。来年度以降の具体的な活動の形については明確に決まっていませんが、メンバーで話し合った結果、龍神村の方々に提案させていただいた地域塾を実現させるために、プログラムが終了した来年度以降も活動を続けていきたいと思っております。

和歌山県新宮市、田辺市本宮町、那智勝浦町

テーマ：世界遺産登録 20 周年プレイベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、熊野を盛り上げよう。
報告では、私たちの一年の活動内容についてと、実際にどのようなイベント案が出たのかについて話しました。一年の活動内容については、事前研修で熊野三山などの地域について勉強し、どのような方向性でイベントを行っていくのかを考えました。夏季休業中に行われた実地研修では、京都産業大学の学生とともに新宮市、本宮町、那智勝浦町に行き熊野三山観光協会様のご協力の元、地域の方との交流やヒアリングを通して事前に考えたイベント案と地域の人の声などのすり合わせ、ブラッシュアップを行いました。これらでできた大枠を 12 月に行われた最終発表会に向けて企画を考えました。最終的に「デジタルスタンプラリー」の案が通りましたので来年度のイベントに向けて準備を重ねていきます。自分たちの一年間の活動を言語化するのはとても良いアウトプットとなりました。LPP のメンバー一同さらに来年度へのモチベーションアップにもつながったと考えています。 

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

テーマ： 中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える
報告会の様子 私たちは「中山間地域における地域ハブ(HUB)の役割と可能性を考える」のテーマの下、今年度行った活動について発表した。初参加のメンバーがほとんどだったので、今年度は地域ハブの役割と可能性を考えるための下準備として「那智勝浦町色川地区について知る」ことに力を入れ、来年度に地域ハブの役割と可能性を考える活動を本格的に始めることを報告した。活動に対して好意的な意見を頂くことができ、学生のモチベーション向上を図ることができた。 LPP 報告会全体としては、様々な LPP 間での交流が見られ、互いに良い刺激を与えることができたのではないかと感じた。ただ、交流会の時間が長く時間を持て余してしまう LPP が多かったので、時間配分や実施方法については再度考え直す必要があると考える。 **報告会で頂いた質問** ① 来年度の活動はどのようなことを行う予定か →地域ハブの役割と可能性を考えるにあたり、那智勝浦町色川地区のキーワードは何かについて検証したいと考えている。具体的には、地域の方々が集う飲食店や宿泊所にノートを設置し、利用した感想を書いてもらいそこからテキストマイニングを行うことを想定している。しかしまだ確定したわけではないので、来年度のメンバー間で話を擦り合わせる必要がある。 ② 活動の拠点となった「らくだ舎」はどのような機能を果たしているか →喫茶店、図書館、書店と一つの施設で複数の事業が行われている場所。お客様と比較的近い距離で交流することができ地域住民、移住者問わず集うことのできる空間としての役割を果たしている。

大阪府阪南市

テーマ：阪南市の産業振興と魅力発信
今回の報告ではメンバーが全員新しくなり、活動内容も昨年度までとは全く初年度ということで阪南市 LPP の活動をより具体的に共有することができました。ただ SASSY というアプリを使った活動内容を示すにあたって、聞いている方々は聞き馴染みのないアプリ名であった方も多かったと考えられるため、写真等を用いたより視覚的にわかりやすい表現が必要でありました。今回の報告で私たちが 1 年間行ってきた活動内容を振り返って、今後 1 年間どのような活動方針で取り組んで行けば良いのかが固まった次につながる良い報告会になったと考えます。 発表後の質問で SASSY と取り組むことになった経緯について聞かれましたが、こちらの説明不足で伝わっていない部分もありましたので改めて説明します。SASSY を開発しました株式会社 Relyontrip と阪南市が協働で阪南市の産業振興と魅力発信事業を行うことになり、そこに私たち LPP も協働しないかとお声がけいただき、プロジェクトを行うことになりました。そこで Relyontrip さんが開発された SASSY を用いて若者視点から見た阪南市の魅力を発信してほしいと要望をいただき、SASSY というアプリを活用することになりました。

大阪府岸和田市

テーマ： 景観資源活用による景観意識の向上と地域の賑わい・活性化への貢献
合同報告会を終えての感想と 3 年間の総括 10 月に開催した中間報告会の際よりも人数が多く、会場内が活気に溢れていただけでなく受け入れ先自治体の方々もお越しになられていたため、終始活発な意見交換が行われていたように見受けられました。 岸和田景観 LPP は本年度を持って活動を終了するため、合同報告会が全員で活動できる最後の機会であった。発表の構成としては本年度のメインイベントである「ぶらり岸和田景観なぞときラリー」の企画段階からイベント本番の様子、実施後のアンケート分析結果と 3 構成に分けて発表を行いました。 実際に発表後はたくさんの方々が私達のポスターに興味を示して下さり、特に新たな試みであるデジタルスタンプラリーについてのご質問を行政の方々を含め多く頂く等、他の自治体でも新たな可能性がある事を提供できた点については、大変嬉しく思っております。また岸和田市の方々にも大変ご好評なご意見を頂戴する事ができ、LPP としての活動が終了した後もイベント実施に伴い作成したコンテンツを有効活用したいとの有り難いお言葉を頂けました。 岸和田景観 LPP としての 3 年間の活動は合同報告会をもって終了となりましたが、3 年間を通じて地域と継続して関わる難しさに悩んだ事も多くありました。しかしそれ以上に地域の美しさや温かさを身にしみて感じる事が出来たと共に、当初の目標である「岸和田市に多く存在する景観資源を広く PR する」を達成出来た事に喜びを感じています。最後になりましたが、3 年間の岸和田景観 LPP 活動を支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

大阪府岸和田市

テーマ：古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。
私たち岸和田市古民家 LPP では、報告の中で 3 つの質問をいただきました。①活動の一環のブックフェスタについて、なぜ本にまつわるイベントを行ったのか。②ブックフェスタで使用した古民家はどのように借りたのか。③今後どのように古民家を活用していきたいか。これに対して、①元々私たち学生の受入先が地域の図書館で、図書館で毎年開催されているブックフェスタに私たちも便乗する形でイベントを行った②LPP の設立当初に古民家の持ち主にご協力いただき、一年を通して使わせていただいている③ 地域の人が気軽に立ち寄れるような、世代間交流の場として古民家を活用していきたいと回答しました。またアンケートには、古民家を活用することによる具体的なまちづくりのイメージはあるかという質問をいただきました。当日の質問の回答にもあったように、古民家を気軽に立ち寄れる居場所として提供し、新たなコミュニティ創出によって活気あるまちづくりをしたいと考えています。交流会の時間も同じような課題を抱える他の地域の方と意見交換をし、大変実りのある場になったため、これを次年度にも活かしていきたいです。

和歌山県有田郡有田川町

テーマ：学生との協働による棚田保全・集落支援活動
報告では 1 年間の活動内容を振り返りました。2023 年度は計 7 回での現地活動が行われ、ほぼ全ての活度に参加した 3 名の学生からそれぞれの具体的な活動内容と、それぞれの学生が感じた所感について発表しました。発表の冒頭ではこれまでの 10 年間のプロジェクトのあゆみ、そして発表の最後には今後の展望について報告しました。 今年度の活動は現地活動のみで、大学祭での出店やその他のイベントでの出店などは行えませんでしたが、コロナ禍でしばらく実現できていなかった地元交流会を行うことができ、私たち学生と地元住民の皆さんの親睦をさらに深めることができました。今後も継続的に地域と関わり続け、集落に活気をもたらすことができたらと願っています。

和歌山県西牟婁郡白浜町

テーマ：白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズにあったサービスの企画開発
報告では、白浜町の現状と白浜 LPP が今年度実施した活動を発表しました。非常に多くの方に報告を聞いていただけました。協働先である(一社)南紀白浜観光協会の方にもお越しいただき、発表を聞いていただくことができました。発表の中で頂いた質問とその回答を以下に掲載します。 Q.アンケートを取ってみて、面白いと思う結果はありましたか。 A.白良浜、臨海、江津良の各海水浴場でアンケート調査を実施したが、それぞれの海水浴場で利用者層が異なり、ニーズも異なっていた。関西から来る方が多く、ほとんどが自家用車で訪れていた。 Q.アンケートを答えてくれない方もいたのでは？ A.休んでいる方に話しかけることでアンケートを答えていただくことでアンケート回収率が上がるよう工夫した。 Q.アンケートの手段はどのような方法にしたか？ A.より多くの声を聞くために、口頭で質問しながら自分たちで回答を記入した。 なお、報告の動画を副リーダー(中川)の YouTube チャンネルにて限定公開しています。 https://www.youtube.com/watch?v=MBtkqzTXPN4

福井県福井市・富山県南砺市

テーマ：北陸カレッジ 2023
報告では、北陸カレッジの内容・福井市と南砺市について・活動の内容・これからの活動について触れました。特に活動の内容については、福井市はターゲット選定の際に使った分析や福井市に対しておこなった提案と実現性などについて言及をしました。また、南砺市は提案を行ったモデルプランの内容とターゲットや価格設定について言及をしました。 以下報告の際に福井市班に来た質問とその回答を掲載させていただきます。 Q. ターゲット選定に分析を用いたということでしたが具体的にどのような方法と結果が出たのですか？ A. 私たちは現地研修を踏まえて福井市をＳＷＯＴ分析にかけました。強みとしては人が温かいこと、自然が多くリフレッシュしやすいことなどが出ました。また機会として北陸新幹線が開業して福井市に来やすくなるということから、ターゲットを 20 代から 40 代の女性の一人旅として日頃の疲れをいやすような旅にするという結論に至りました。 Ｑ．サシェを作るという提案がありましたが、匂いはどうして福井市の有名なものなどの匂いを使わなかったのですか。 Ａ．匂いは一人旅の不安を解消するため、またリフレッシュ効果をもたらすことが目的のため花の香りなどをメインとして、デザインの面を福井市の固有の鳥や花にしました。

和歌山県和歌山市

テーマ：雑賀崎の観光スポットの情報発信と空き家の利活用
雑賀崎 LPP は、4 人で合同報告会に参加しました。報告では今年度実施した空き家事業、自分たちで企画した子供向けイベント、今後の展望などを発表し、多くの方々に興味を持っていただきました。今回の発表を通して雑賀崎の魅力も発信できたのではないかと考えています。しかし、同時に雑賀崎の知名度が低いといった今後の課題も明確になりました。 発表後の Q＆A や交流会の時間にいくつかの質問をいただきました。以下、それらを掲載します。 Q.高野山で実施したアンケートはどのような方法で実施しましたか？また、なぜ高野山なのですか？ A.英語で記載された用紙と Google フォームを用いてアンケートを実施しました。簡単な英語を話し、交流も行いました。高野山で実施した理由は、外国人観光客が多い地域であったためです。雑賀崎地域に英語圏の外国人観光客を誘致したいためこの場所を選定しています。 Q.ワークショップではどのようなことを話し合い、学びましたか？ A.他地域の空き家活用事例を学び、そこから実際に雑賀崎ではどのようなことができるかを議論しました。具体的にこの空き家ではこのようなことができるといった部分も考えることができました。今後は今回得た結果を生かし来年度より本格的に空き家の活用に取り組んでいきたいと考えております。

地域連携プログラム（LPP）の沿革

■2008～10 年度（平成 20～22 年度）
地域インターンシップ・プログラム（通称 LIP ※2012 年度に改称）は、2008 年観光学部の設置とともにスタート。観光学部より和歌山県下の自治体への協力要請を行い、各教員が担当する自治体との協議を重ね、早いプログラムでは 2008 年度中に、遅いものでも 2009 年度中にはプログラムの実施に至った。
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：
6 件／42 名（2008）、8 件／46 名（2009）、3 件／18 名（2010）

■2011 年度（平成 23 年度）
・地域連携担当の配置
・地域インターンシップ実施要項の整備
◇地域（自治体）からプログラム内容について提案を受け付ける「地域提案型」と教員の地域との共同研究をベースとした「申請型」の 2 つのプログラムを設定。
◇主要な活動対象エリアを、和歌山県内に加えて大阪南部の自治体（岬町、阪南市、泉南市、田尻町、泉佐野市、熊取町、貝塚市、岸和田市）にまで拡大。
・地域提案募集：5 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：4 件／24 名

■2012 年度（平成 24 年度）
・名称変更：RIP から LIP へ改称
・実施要項の改訂
◇申請型については、主たる活動エリアを和歌山県内と大阪南部以外でも可とした。
・地域提案募集：5 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：11 件／80 名

■2013 年度（平成 25 年度）
・地域連携の所管が観光教育研究センター（現：観光実践教育サポートオフィス）となり、担当者を配置。
・LIP の制度改善を図るため、活動実績のある自治体の担当者にヒアリング調査を実施。
・LIP の認知度や参加意識を明らかにするため、学生対象のアンケート調査を実施。
・地域提案型プログラムの質向上のため、活動実績のある自治体や和歌山市周辺の自治体を廻り、LIP の評価の聞き取りや新制度についての周知活動を実施。
・地域提案募集：4 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：5 件／73 名

■2014 年度（平成 26 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2014 年度活動の報告書を作成（以後継続して作成）。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：10 件／139 名

■2015 年度（平成 27 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2015 年度活動の報告書を作成。なお、報告書には、2008～2015 年度までの LIP に関するデータを所収（以後継続して所収）。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：15 件／191 名

■2016 年度（平成 28 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2016 年度活動の報告書を作成。
・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施（以後継続して実施）。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：21 件／227 名

■2017 年度（平成 29 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2017 年度活動の報告書を作成。
・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：19 件／217 名

■2018 年度（平成 30 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2018 年度活動の報告書を作成。
・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：13 件／190 名

■2019 年度（令和元年度）
・LIP 周知活動の一環として、2019 年度活動の報告書を作成。
・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・LIP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LIP 合同活動報告会」を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：14 件／194 名

■2020 年度（令和 2 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2020 年度活動の報告書を作成。
・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 3 月に送付
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：16 件／209 名

■2021 年度（令和 3 年度）
・LIP 周知活動の一環として、2021 年度活動の報告書を作成。
・LIP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・LIP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LIP 合同活動報告会（オンライン）」を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。活動内容の質的向上のため、公募タイプのうち 2021 年度新規提案募集分から、地域側から事前に担当教員の希望を受け付け、教員が承諾したものをプログラム化することとしたため。
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：21 件／231 名
・2022 年度（令和 4 年度）から、「地域連携プログラム（Local Partnership Program, LPP）」へと名称・枠組みを変更することとなり、制度設計の見直し・各所への通知などを実施。

■2022 年度（令和 4 年度）
・「地域連携プログラム（Local Partnership Program, LPP）」へと名称・枠組みを変更。
・LPP 周知活動の一環として、2022 年度活動の報告書を作成。
・LPP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・LPP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LPP 合同活動報告会」を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。LIP から LPP への移行期間とするため、2022 年度は新規プログラム（L ゼミ地域公募タイプ）の募集は実施せず、2021 年度からの継続プログラムおよび L ゼミ教員申請タイプ、L 活を実施した。
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：19 件／210 名

■2023 年度（令和 5 年度）
・LPP 周知活動の一環として、2023 年度活動の報告書を作成。
・LPP への参加意識や活動から得られる学びを把握するべく、参加学生を対象に活動前後のアンケート調査を実施。
・LPP での学びや活動の振り返り、共有を目的とした、「LPP 参加学生交流会」を実施。
・LPP の質的向上、学びの深化、広い活動発信を目的に「LPP 合同活動報告会」を実施。
・地域提案募集：地域と大学間の事前協議期間を確保するため前年度 1 月に送付。
・実施状況／参加学生数（延べ人数）：18 件／189 名

【これまでの LIP/LPP 活動地域と活動テーマ一覧】

市町村名	活動年度	活動テーマ
和歌山市	2009	四季の郷公園周辺調査等
	2010	四季の郷公園と周辺農地を利用した農業観光の振興、および中心市街地との連携による活性化調査
	2011	お城を中心としたまちなか回遊性の創出
	2014	和歌山市民の森づくり事業
	2015･16	和歌山公園動物園（通称：お城の動物園）の環境エンリッチメントを通じた観光活用
	2016	地域資源を活用した、見どころマップの作成とまちあるきの実施（山東地域）
		名勝「和歌の浦」の魅力発信
		和歌山市立伏虎中学校の閉校記念誌づくり
	2016･17	観光資源を活用した観光振興の体験と調査・研究（和歌山城におけるおもてなし忍者による観光振興を通じて）
	2017	和歌山公園動物園（通称：お城の動物園）の地域資源としての観光活用～和歌山公園動物園の今後とリニューアルの検討～
	2021-23	加太・磯の浦エリアにおける観光映像を活用した地域振興
	2022	雑賀崎の観光スポット（レモンの丘）整備と活用のための情報発信（L 活）
	2023	雑賀崎の観光スポットの情報発信と空き家の利活用（L 活）

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩出市	2015	観光地の活性化と情報発信
	2018	SNS を利用した地域資源再発見と訪れてみたくなるコンテンツ作り
	2019	ねごろ歴史の丘巡りスタンプラリー帳作成
	2020-22	道の駅「ねごろ歴史の丘」利用者調査及び利用促進企画

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀の川市	2009	青洲の里施設内で実習および農家民泊体験、地域住民との意見交換
	2010	「細野渓流キャンプ場」集客向上と地域活性化の検討
	2011	細野渓流キャンプ場を起点とした地域活性化
	2012-16	紀の川市地域活性化
	2018-22	紀の川スイーツの開発
	2023	紀の川市の新商品開発プロジェクト

市町村名	活動年度	活動テーマ
かつらぎ町	2008	花園ふるさとセンターの有効活用に関する調査研究
	2012	かつらぎ町日帰りプランの作成
		都市近郊中山間地域における交流型農業への展開可能性を探る

市町村名	活動年度	活動テーマ
橋本市	2009	青年の家やどりの運営体験およびリニューアルプランの検討

市町村名	活動年度	活動テーマ
海南市	2020-22	交流・ 関係人口増を目指したエリア体験型観光コンテンツ開発
	2023	大崎地区の歴史と現状を体験的に調べ、暮らしを継続的なものとするためのステップを議論する

市町村名	活動年度	活動テーマ
紀美野町	2014	地域活性化にむけた調査研究（現地ヒアリング）
	2015-17	地区×学生による継続可能な地域活性化にむけた寄り添い型支援体制の構築と観光・交流情報発信
		世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（認知症カフェでの実践を通じて）
	2018	地区×学生による知られざる歴史掘り起こしと観光・文化・交流情報発信
	2018･19	世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（コミュニティカフェ等での実践を通じて）
	2019-23	地区×学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生
	2020-22	きみのげんきマップの作成

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田市	2013	みかん産地の農家の今後を考える（有田地域みかん農家経営継続課題調査）
		有田地域における魅力的な居住環境を考える（有田地域の居住地選定要因に関する調査）
	2014	地元小学生が見つけた地域の資源に対する傾向・特性調査とその活用提案
	2016	魅力ある図書館づくり―新図書館開館にむけて―
		空き家活用による地域活性化プロジェクト
	2017	市民が集う市民会館づくり―新市民会館開館にむけて―
	2017-18	地域で働く人の魅力を子どもたちに伝える
	2019	箕島の魅力発信
	2020-22	箕島で暮らす多世代の住民による魅力再発見
	2020-23	青みかん（摘果みかん）の価値を上げる
	2023	ICT の活用による多世代で取り組むまちづくり

市町村名	活動年度	活動テーマ
有田川町	2008･09	観光スポット調査（鉄道フロムナード、あらぎ島・清水温泉周辺）、および各種施設における就業体験

	2010	観光スポット調査（観光ブドウ園ほか）、および各種施設における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2011	観光スポット調査、および各種施設（鶏卵牧場ほか）における就業体験と町内宿泊施設におけるモニター宿泊
	2012･13	学生との協働による棚田保全活動体制の構築に関する基礎調査
	2014	しみず体験・学習プログラムの開発
	2014-18	学生との協働による継続的な棚田保全活動体制の構築
	2019-21	学生との協働による継続的な棚田保全活動（棚田ふぁむ）
	2022-23	学生との協働による継続的な棚田保全・集落支援活動

市町村名	活動年度	活動テーマ
湯浅町	2009	町内主要施設の視察と集客イベントへの活用法の検討、および有力事業者への観光誘客に関わる聞き取り、イベントにおける JAZZ バンド演奏会の開催
	2023	湯浅の若者と共につくる本気の商品開発！

市町村名	活動年度	活動テーマ
広川町	2014-19	津木地区寄合会の運営、特産品開発、情報発信、イベントを共に考える
	2020-21	ツーギー谷のお花畑の活用を通した津木地域の活性化を考える
	2022	ツーギー谷のお花畑の活用を通した津木地域の活性化を考える（L 活）

市町村名	活動年度	活動テーマ
由良町	2014	観光地の新たな魅力発見

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高町	2016･17	地域資源の自慢を後世に引き継ぐと共に経済効果のある参加型イベントの企画立案を共に考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
日高川町	2008	小学生の農村生活体験実習受入のための基礎調査
	2009	子ども農山漁村交流プロジェクト推進のための学生サポーターおよび課題発見
	2012	日高川町における祭事を中心とした伝統文化と地域活性化についての調査
	2017-19	体験教育旅行＆夏学習～都会と大自然の出会い（かつらぎ町も含む）

市町村名	活動年度	活動テーマ
美浜町	2017	日の岬・アメリカ村の歴史的資源等を活用した観光とふるさと教育
	2019	カナダミュージアムにおけるミュージアム機能の強化

	2020-22	アメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信
	2023	美浜町の資源を生かした観光誘客

市町村名	活動年度	活動テーマ
みなべ町	2012	みなべ町の新たな魅力発掘・発信事業（みなべ観光協会事業）

市町村名	活動年度	活動テーマ
田辺市	2008	秋津野ガルデン附設レストラン「みかん畑」利用客の観光行動アンケート調査、及び田辺市広域市町村圏の関係者との意見交換
	2009	農山村における UJI ターン者と地元住民との連携
	2012	和歌山県版・農山村ワーキングホリデーのシステム構築
	2017	ほっとスポット温川プロジェクト

市町村名	活動年度	活動テーマ
白浜町	2023	白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズに合ったサービスの企画開発

市町村名	活動年度	活動テーマ
上富田町	2008	観光資源調査と地域の農・商・工関係者との意見交換会
	2017	地域資源を活用した“おどろきと感動”の地域づくり
	2018･19	笑顔が広がる美しい里づくり

市町村名	活動年度	活動テーマ
すさみ町	2008	各種体験観光施設の調査と関係者への聞き取り

市町村名	活動年度	活動テーマ
串本町	2017	マグロ料理で観光ＰＲ

市町村名	活動年度	活動テーマ
那智勝浦町	2016-18	地域の文化や風習、そこで暮らす人々と直にふれあいながら、これからの地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2019	地域の文化や風習の体験、獣害対策、農作業、冊子作りを通じて地域の方々と触れ合い、地域・自分・社会のあり方・つながり方を考える
	2020-22	地域の文化や風習の体験を通じて、地域住民と触れ合い、地域・自分・社会のより良いあり方・つながり方を考える。（興味関心に応じて）地域をフィールドにそれぞれの知見を深め、価値を創出していく。
	2023	中山間地域における地域ハブ（HUB）の役割と 可能性を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
新宮市	2020-21	新宮市高田区における観光モデルコースの造成

市町村名	活動年度	活動テーマ
太地町	2009	移民関連勉強会、および地域住民、町職員との意見交換
	2012	地域資源として移民輩出の歴史を活かした観光の活性化を考える

市町村名	活動年度	活動テーマ
岬町	2012	「道の駅」建設に伴う検討委員会
	2015	マップを手にウォーキングをしたくなる気持ちを沸き立たせる「まち歩きマップ」の作成
	2016	岬フィールドミュージアム構想
	2017	着地型観光による地域活性化の取り組み
阪南市	2016	産業観光ワークショップ　HANNAN OSAKA　cotton project
	2018･19	地方創生にかかる地場産物商品に関する調査・研究、デザイン考案等
	2020-22	古代米を活用した商品開発、PR に関して。「古代米をおいしく食べる」
	2023	阪南市の産業振興と魅力発信
田尻町	2015	君が見つけるたじりの魅力―出会いと交流で創る健幸のまち―
熊取町	2015	第 4 回熊取ふれあい農業祭
	2016	第 5 回熊取ふれあい農業祭
	2017	第 6 回熊取ふれあい農業祭
岸和田市	2021-22	港湾エリアにおける持続可能なまちづくり
	2021-23	景観資源活用による景観意識の向上と地域の賑わい・活性化への貢献
	2021-22	岸田和市とアドベンチャーワールドが創る未来の smile とは
	2023	古民家活用を通して地域課題の解決策を考え、実践する。

市町村名	活動年度	活動テーマ
岩手県奥州市 および和歌山県	2012	故郷（ふるさと）への誇りを取り戻すためのグリーン・ツーリズム
	2013	農村ワーキングホリデーを通じた農村再生の可能性を探る
	2014-21	農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証
北海道 幕別町	2014･15	地域の観光に係る調査研究（観光と地域のあり方についての調査研究及び観光資源の掘り起こし等）
富山県 南砺市	2015	五箇山における持続可能な観光の実現に向けた実証調査
長野県 飯田市	2015･16	道の駅遠山郷を核とした地域活性化

宮崎県	2016	みやざき観光コンベンション協会からの依頼に基づいた同県「波旅宮崎」キャンペーンのより効果的な展開に対する提案、提言作成
山口県岩国市および愛媛県新居浜市	2020	瀬戸内カレッジ 2020
岡山県津山市および香川県坂出市	2021	瀬戸内カレッジ 2021
広島県広島市および香川県さぬき市	2022	瀬戸内カレッジ 2022
福井県福井市および富山県南砺市	2023	北陸カレッジ 2023

地域･団体名	活動年度	活動テーマ
JA いずみの管内	2011･12	JA 直営型農産物直売所を拠点とした都市農村交流の推進
わかやま産業振興財団	2015･16	特産果樹がもたらす共創価値の創造（新たな健康・産業づくり）
公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合	2017	公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合が主催する国際・第 38 回全日本マスターズ陸上競技選手権大会においてスポーツを通じて、地域の人びとや海外競技者との国際交流
和歌山県	2018	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」、大会参加者に対する観光ツアーの開発（和歌山県全域）
	2019	「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」における、観光ツアー同行を通じた観光業務の実践（和歌山県全域）
	2020-21	「紀の国わかやま文化祭２０２１」学生による文化の魅力発信（和歌山県全域）
	2021-23	「林業×地域」の再発見による地域将来ビジョンの策定とシナリオプランニング（田辺市龍神村）
	2023	世界遺産登録２０周年プレインベント 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を学び、熊野を盛り上げよう。（新宮市、田辺市本宮町、那智勝浦町）

2023　地域連携プログラム活動報告書
令和 6 年 3 月 31 日発行
発行　和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930
印刷　井手印刷株式会社

↑大阪
↑なんば
和歌山大学前
和歌山大学
26
南海本線
←加太
紀ノ川
紀和
24
八幡前
東松江
南海加太線
南海
和歌山市駅
和歌山
市役所
和歌山
県庁
和歌山城
紀の川
N
42
和歌山港↓
海南・白浜↓
御坊・田辺↓
新大阪・天王寺→
JR阪和線
→紀の川市
橋本→
JR和歌山駅